
僕らは長い長い夢をみていた

三端ジュン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らは長い長い夢をみていた

【Nコード】

N4869S

【作者名】

三端ジュン

【あらすじ】

生まれ持った瞳の色にコンプレックスを抱いている青年、雨宮漣。縁あって知り合った年上の女装子、安藤奈緒の家で気楽なフリーター生活を送っていた漣は、

19歳の誕生日に不思議な少年と出会う。山本聖、と名乗った少年との関わりから、漣と奈緒の抱える心の傷が少しずつ癒されていく。2人が長い長い現実逃避から立ち直るまでの話。

雨の日と一年前の話

リビングルームで転寝をしていた漑は、ドアの開く音と、中に入るなり発せられた奈緒の声で目を覚ました。

「イヤだわ、急に降ってくるんだもの」

漑は顔を上げ、瞼を擦った。何も思い出せないけども、いい夢をみていたような気がする。

「あら、漑くんこんなところで寝ちゃってたの、寒くない？」

買い物をテーブルの上に、中から取り出した紙パックのオレンジジュースを奈緒は自分と漑の為にいれ分ける。一つを漑の前に置いた。

「ふあ…」

「もうずっと雨ばかりで嫌になっちゃう。洗濯物だって乾きやしない」

「そう…俺は結構雨降ってんの好きだよ」

奈緒はへえ以外、とでもいうような顔を向けた。そしてもう一度、寒くないかしら？と聞いてくる。

雨に濡れたせいで冷えているのだろう。

漑は首を振った。

「すぐご飯作るから、ちょっと待っててね」

髪を一つに束ねながら、奈緒はキッチンの奥へと消えた。

漑はまだ眠気の残る頭を掻いて、床に寝そべった。

さあさあ、と、耳元に心地よく雨音が聞こえる。キッチンからはまた別の水音が聞こえてきた。

—— 今から、丁度一年ほど前。

雨宮漑は、18歳になったのを機に一人暮らしを始めることにした。6月の半ば、何だかきりの良くない数字ではあるがそこは6月生まれなのだから仕方がない。

母親はいない。漑を溺愛してやまない父親は、それ故にまた反対することもしなかった。

「いつでも、顔を見せに帰っておいで」

漑はああ、と短く答えた。

郊外に、まだ通学するのに不自由のない距離の物件を探した。

「何なんだよ、ソレ」

条件はともかく、親の負担になるのを避けようと一番安く借りられる部屋を探していたのだが、

案内されたのは割に普通の部屋だった。

それもそのはず、そこは間違っって紹介された物件で、しかもすでに

暮らしている住民までいるとの事。

おまけに遷の契約しようとしていた場所は、先日別の誰かが契約したばかりだというのだ。

いい加減な業者相手に遷は腹ただし気な声を上げる。管理人の老人はただひたすら口先で謝るばかりだ。

そんな二人のやりとりを、件の部屋の住人もすぐ隣に立って聞いていた。

話し合いの中に、別の落ち着いた調子の声が混じった。

「ねえ、その君。次が見つかるまでの間、よかつたらここに住まないか？」

…他に行くところがないんだろう？

言われて、その声の主を遷は見た。自分よりもヒールの分だけ長身で腰まで伸びたロングヘアのすらりとした美人だ。

「いや、そんな！貴方に迷惑をかける道理はないし、それに僕なら、実家に戻ればいいだけですから」

それよりも見知らぬ女性の部屋で、なんてとんでもないと遷は首を振って断ろうとした。

その人、名前を安藤奈緒といった。奈緒は笑って言う。

「細かいことはいいつこなし！男に一言はねえよ」

……

「え？」

奈緒はにいつと、さつきとは様子の違う笑顔を浮かべた。
長い髪と、やや濃い目のメイクを施してはいるものの、それは男らしいというか
頼れる兄貴分といったような雰囲気のある笑顔だった。

奈緒は女装趣味をもつ男性だった。そしておまけに漣より一回り以上年上で、34歳だった。
とてもそっちは見えなかったが。

「漣くん、これ片づけるよ？」

奈緒はテーブルの上の求人情報誌を重ねてテーブルの端に置いた。

「…なんか、いい仕事ないっすかねえ？」

「いいじゃないの、当分はバイトでも。やりたいことがまだ見つからないとかいってたじゃない」

漣は両親共に日本人だが、何故か生まれつき瞳の色が青かった。
自分でもそれが気になって、黒縁の色の入った伊達眼鏡を掛けている。

カラーコンタクトなんてものがあるおかげで、自分の印象が軽いようにとられてやしないかと気になった。

「まあ、親父がさあ、うちの会社来いよ。ってでは言ってくれてんだ

けどさ」

「それは、イヤなの？」

「俺の中途半端なプライドが邪魔をする」

「漣くんも明日で19でしょ？大人になりなさいってことよ」

「ああ、そっぴやもう一年か」

「あたしも年を取るはずだわ」

奈緒は両手を頬に当て、イヤイヤというふうに頭を振った。

「そつだ。明日ね、仕事で帰るのが遅くなっちゃうんだわ。漣くんにケーキ予約してるの、ゴメンだけどお店で貰ってきてくれないかな？あたしじゃお店、閉まっちゃうのよね」

「え、そんなー、氣い使わなくってもいいのに」

渡された半券には近場で評判の良い店のロゴがプリントされていた。

「いいじゃん。二人だけでもさ。お祝いしましょ？」

奈緒は相変わらず、小さな事には拘らない性質だ。
他人のために何か出来ることに喜びを見出す。

少しの間借りのつもりが、気が付けばもう一年が過ぎるのだった。

居心地が良くて、そんなことはすっかり忘れていた。
自分勝手に居座って、迷惑をかけている自覚すら忘れていたかもしれない。

「考えてみれば、漣くんと出会ったのって、ステキな偶然だわ」

彼（彼女？）はそう言って笑うのだけど。

公園で

何日か振りの晴れた天気、開け放した窓からは気持ちのいい風が吹き込んできた。

「誕生日だね、漣くん。おめでとう」

漣は照れくさそうに頬を掻いた。「お父さんにも、電話してあげるとよろこぶんじゃないかな？」奈緒は言いながら朝食の後片づけを始めた。

「あのさ、…ありがとう。その、色々」

「やだなあ。改まっちゃって」

一瞬、ふつと暗い表情を浮かべた奈緒が漣を見つめている。

「…漣くんは、一人でやっていこうって思ってたんでしょ、あたし、もしかしてあなたの気持ちの邪魔になってるんじゃないかな」

漣は思ってもみない言葉にうーん、と唸るような声を上げた。少し考え込むようにした後で再び奈緒を見る。

「俺んとはさ、母さんが早くに居なくなつて、それから父さんはすげー過保護になつてさ。俺も…。たぶんお互いどう関わっていいかわからなくなつてたんだと思う。だから、一遍距離を置きたかった」

奈緒は静かに漣が話すのを聞いていた。

「一人じゃまだ何にも出来ないんだなあ…って、わかったんだよ。俺の方こそ、迷惑ばかりかけてごめん。だから、本当の意味で次の居場所が決まるまで、もう少し。ここに置いてください」

それから、漣は頭を下げた。

奈緒は微笑んで漣の髪をそっと梳くように撫でる。

「こちらこそ。これから、よろしくね」

『また、一人になるんじゃないかって、僕はさ、…』

奈緒は漣の言葉に少しだけ、本音を口に出したかったが、結局言葉にはしなかった。

先に仕事に出ていく奈緒は、「鍵、いつものところでも、漣くんが持っててもいいよ」と言い残して出かけた。

バイト先には、10時までに入ればよかったので、少し外で時間を潰すことにした。久し振りにいい天気だったから。

公園を通り抜ければ、少し近道になる。いくつか並べられているベンチの一つに、一人の少年を見かけた。見かけない学校の制服姿だった。彼は一人、ベンチに腰かけるとシヤボン玉を吹いている。

きらきら光る虹色のシャボン玉は少年の周りをいくつも生まれては消えていった。

勿論、シャボン玉を作って遊ぶような年頃の子どもというわけではない。不思議な子だな、そう思いながら漑は前を通り過ぎた。

通り抜けた先の出口で、なにか騒がしく辺りをうろついている集団とすれ違った。みるからにヤバそうな雰囲気のものたちだ。

彼らはまるでなにか、誰かを捜しているらしかった。断片的に聞こえてくる会話からそう察せられる。

漑の後ろでなにか物音が聞こえた。がさがさ、と何かが茂みの中を移動したような。

そのうちの一人が漑に声を掛けてきた。

「なあ、兄ちゃん。この辺りで妙なガキを見かけなかったか？」

「い、いえ…知りませんけど」

男はちつと舌打ちすると集団に合流した。そのまま、彼らの一団が公園を後にする。

振り返って、ベンチの方を見た。件の少年の姿はない。

漑はまた公園内に戻って辺りを見回すと、遊具の陰にうずくまる彼を見つけた。

何かに怯えた様子だった。漑は出来るだけそうつと近寄る。

「怖い人は、どっかに行ったよ」

そう言うと、彼が顔を上げた。

その大きな目がはつきりとこちらを見ている。黒目がちな瞳の色は、光の加減もあつてかまるで金色に近く光って見えた。

「きれいな目、」

そう言われて、漣ははっとした。何か、性別のはっきりしないような声色だった。

先ほどまでの怯えた様子はすっかり影を潜めている。

漣は少年を立ち上がらせると、人目に付きにくい方のベンチに移動した。

彼は所在なさにシャボン玉のストローを咥えて吹いていた。液体の入った容器はさつきこぼしてしまっただけ。

「さっきの人たち、君のことを捜してたみたいんだけど」

くるりと首を回し、少年が漣の方を見た。

「あ、いや、ごめん。…でもなんで、君は隠れたりしたのかな？」

少年は口が利けないわけでもなさそうだが、ずっと黙り込んだままだった。

どうやら、この件については関わって欲しくないらしい。

ひゅー、ひゅーとストローが鳴き声のような音を立てている。

それが、何かを紛らわせたい様子に漣には思えた。

すっと立ち上がる。と、彼の視線もそのまま上を向いた。漣の姿を目で追っている。

近くの自販機で飲み物を買った。

「ジュースとか、飲む？」

手渡すと、彼はそれを受け取ったまま、手元で転がしている。

もう時間が迫ってきていた。

「事情とかは聞かない。でもこんな所にいちやダメだよ。その交番とか、誰か大人の人に助けてもらいな」

それじゃあ、と漣は公園を後にした。

ひゅう、ひゅう、と、乾いた音が次第に遠ざかる。

見上げた空が、また曇りはじめていた。

バイトの時間を終えた頃には、もうすっかり雨が降り出していた。傘を差し、漣はもう一度、公園の中を一回り歩いてみた。

「まさか、もう居ないとは思うけど…」

ベンチを見た。誰もいない。少しほっとした。

公園を後にする。ケーキの箱を抱えていることもあり、濡れないうちに早く帰りたいかった。

出ですぐ近くの道端に、何か黒っぽい塊を見かけた。何かがつずくまっているようだ。

近づいてよく見ると、それは紛れもなくあの少年だった。

全身ずぶ濡れになっている。

「おい、大丈夫か、」

漣は駆け寄って声を掛ける。震えていた彼がはっとしてこちらを向いた。

あの、金色の両目が漣を捉える。…不意に、奇妙なイメージが浮かんだ。

まるで捨てられた子犬をみつけたような。

誰か、この子をよろしくおねがいします。名前は――

そんな下らないことを考えていると、少年がその場にどさ、と倒れた。

雨に打たれて、体が冷たくなっている。漑は荷物を放り出して慌てて彼を抱き抱えた。

微かな呼吸が頬を掠める。

薄い体は棒切れを抱えているように、ひどく頼りなかった。

少年を抱えたまま随分難儀したが、玄関の力ギを開けると荷物を玄関先に放っておいて、電気のスィッチを入れた。

リビングの床で寝かせた彼を、バスタオルで包んでそつと髪を拭いてやる。

やがて目を覚ました彼は、自分が見知らぬ場所にいることに気付くと戸惑った素振りをみせた。

「あのさあ、せめて濡れないようにところに居ろよ。風邪引くだろ」

漑の言葉に彼がびく、と体を強張らせた。

そんなつもりではなかったが随分きつい口調になってしまった。

「あ、俺は別に怒ってるわけじゃあ、」

その時、ドアの開く音がした。「漑くん？どうかしたの？」

「あ、奈緒さん……」

もう一人、見知らぬ人物が増えたことに少年が怯えている。リビングにたどり着いた奈緒はいったい何？と言いたげな顔をして

いた。

「どうしたのその子、漣くんの知ってる子なの？」

「あ、いや、これは…それが俺にもよくわからなくて」

「っていうか二人ともどうしたのよ、ずぶ濡れじゃない！風邪引いちやうわよ。早くお風呂入りな！」

奈緒は浴室の明かりをつけて、湯沸しのスイッチを入れた。

「俺は大丈夫なんだけど、それよりこの子が」

漣はバスタオルの上から水分を拭き取るように動かす。包まった彼は今度は奈緒を見上げた。

奈緒は状況を把握出来てはいなかったが、少年に対して優しく笑いかけた。

「よくわかんないけど、とりあえず濡れちゃってるからね。お風呂の使い方わかるかな？」

少年は固まったままずっと奈緒の様子を伺っている。奈緒は漣の方を向いた。

「事情は後でゆっくり聞いわ。とりあえず、あたしがこの子をお風呂に連れてくるから」

行こうか、そう言って手を取ると、彼は大人しく奈緒について歩いた。

漣はタオルで濡れた髪を拭った。

浴室から声がする。

「ゴメン、なにか着られるもの持ってきてくれる？」

漣は玄関に放り出した荷物を引き上げた。彼の手荷物は、学生用のカバンが一つきりである。

鍵が開いて、中身が入口に散乱していた。

携帯電話と、なにやらガラクタのようなものばかりが入っていた。

手掛かりになるかと思った携帯は、電池切れになっている。

しばらくして奈緒がリビングに戻ってきた。

漣は昼間あったことを話した。

「あの子、俺にも誰なのかわかんないんです。なんか、追っかけられてるの見て、帰りにずぶ濡れになって倒れてて」

「うん、どうなんだろ。警察に届けた方がいいのかな」

「あの子は、」

「向こうで眠ってる。お風呂で寝ちやいそうになって、大変だったわ。なんかひどく疲れてるみたい。あの様子だと、ずっとそいつらから」

逃げてきたんじゃないのかな」

漣は手にした携帯電話をぎゅ、と握りしめた。

「携帯も死んでるし。なんか、これくらいしか手掛かりになるようなのないんですけど」

「あ、これ、あたしのと同じじゃない？充電器が使えるかも」

水に濡れてはいたが、幸い壊れてはいなかった。充電を開始してもなく、その携帯から着信音が鳴り出した。

一目惚れ

「え……」

澪は携帯を落としそうになり、慌ててコードを掴んだ。

着信は10秒程で切れた。

澪は奈緒と目を合わせる。

「あたし、あの子の様子みてくるよ」

奈緒はそう言って寝室へ向かった。

携帯を開いてみる。画面には着信あり、の表示がある。

「勝手に弄ったりしたらダメだよな、やっぱ」

再び携帯が鳴り出した。画面にはお兄ちゃん、の表示。

「何なんだ……」

今回は少し長めに鳴り終えた携帯を手に、澪もリビングルームを後にした。

立ち上がった澪の視界の端に、濡れて潰れたケーキの箱が見えた。

ベッドでは、灰色のスウェットに着替えた少年が眠っていた。

「あ、漣くん。ごめんそーい。やご飯まだだったね」

「いや、それはいいんだけど…ごめん、せっかく買ってもらったのにさ、ケーキ台無しになっちゃって」

「気にすることないよ、大変だったんだろ？」

漣も奈緒の隣に座った。奈緒がそつと少年の髪を撫でる。

「かわいい子だね」

奈緒はにやにやした表情を浮かべて漣を見た。

「お、俺は別にそんなつもりじゃあ！」

「なに焦ってんのさ？冗談だよ。漣くんにそんな甲斐性あるわけないじゃん」

「もー、奈緒さん！」

「ん…」

二人が近くで騒いだせいで少年が目を覚ました。

「あ、ごめんごめん。起こしちゃったね。…ねえ君、具合はどうだい？」

奈緒が顔を近づけると少年はぐ、と体を強張らせたが、しばらくしてから起き上がり奈緒を見つめた。

「…お姉ちゃん、誰？ここは？」

それからぐるっと辺りを見回して、今度は漑の方を見た。

「…助けてくれたんだ」

「大変だったね、君も」

奈緒はぽん、と頭に手を置くと、立ち上がった。

「あたしごはんの支度してくる」

奈緒が行ったあとで、漑は空いた場所に移動した。少年がありがとう、と呟く。

漑はいいって、という仕草をしてみせた。

「お兄ちゃんは、一体だれ？」

「俺？ああ、俺は漑、雨宮漑っていうんだ。さっきのまあ、お姉さんは奈緒さんって名前。ここは、その人の家だよ」

「れいくん、」

彼は覚えたばかりの名前を口に出した。

「なあ、それよりお前、一体何モンなんだよ。妙な奴らがお前のこ
と捜してるわ、カバンの中はおもちゃばっかだわでわけわかんねえ」

彼は聞いているのかいないのか、ただじっと漑の顔を見詰めている。

「漣くんの目、青くてきれいだね」

彼は起き上がると漣に抱き着いてきた。勢いでぼす、とベッドに押し付けられる格好になる。

「わ、」

彼は漣の背中に回した腕にぎゅうと力を込めてきた。

「な、何すんだよいきなり」

「僕漣くんのことが好きになったの」

「――。…な、なんだって？」

彼は胸元に押し付けていた顔を上げた。心なしかさつきよりも潤んだ目でこちらを見ている。

「僕は聖っていうの。漣くんは、きれいだね」

聖、と名乗ったその少年は再び甘えたように体を寄せてきた。

「ちよつまで、だから何、お前なんなんだよっ」

「漣くん？なにどうかしたん？」

騒ぎに気付いた奈緒がやってきた。

漣は今、聖にベッドに抑え込まれた格好になっている。

「ほーう」

「っってゴカイですって！信じてくださいよっ」

奈緒は堪えきれずに吹き出す。

「わかってるよー。てか漣くんが押し倒されてんじゃーん」

「もー！」

漣は体を起こすと聖を引きはがそうとした。聖が訴えかけるような目で見ってくる。

はあ、と盛大にため息をついた。

奈緒がそれをみてクスクス笑っている。

「奈緒さん、コイツ男の子ですね？」

「うん、男の子だったよ」

また携帯が鳴り出した。漣はポケットから取り出すと聖に開いた画面を向けた。

「さっきからこの、お兄ちゃんってのから掛ってる電話、どうなんだ？出てもいい相手なのか？」

「お兄ちゃん？」

聖が携帯を受け取る。ようやく解放されて漣はふう、と息をついた。通話ボタンを押すや否や、携帯からは大声が聞こえてきた。

『聖か！一体どこに居るんだ！』

「…声が大きいよ、耳が痛い」

『ああ、悪い、それよか何日も連絡こねーわで心配してたんだぞ俺は。』

「…？お前、今どこにいんだ？まさか捕まったわけじゃねえよな！』

聖は携帯を下し、澪を見た。

「…わかんない。あのね、澪くんが僕のこと助けてくれたの」

『澪くんって、誰だそれ？友達か？』

「うっん、知らない人」

『…なあ聖。ちょっとその人と電話代われ』

「うん」

聖は携帯を澪に差し出した。

「お兄ちゃんが代わってくれってさ」

澪は恐る恐る、聖から受け取った携帯を耳に当てた。

「はい、…代わりました、けど」

『失礼だが、アンタは一体誰だ？』

電話の声の主は訝しむような調子の声で聞いてきた。

「いや、僕は偶々、この子が道端で倒れてるのをみかけたんで、家で介抱してるってだけなんです。いや、知り合いとかじゃあなくって」

漑は昼間にあったこともかいつまんで話した。

『すまねえ、うちの息子が、とんだご迷惑を！』

状況を把握した相手の男が、突然大音量で叫んだ。受話器の向こう側で盛大に土下座して謝罪する様が目に浮かぶような声だ。

「声が大きいって…お兄さん。って、あれ？息子って？」

『ああ、すまねえ。こっちの話で』

電話の声の主はぼそつと呟いた。それからまた、さっきまでの大声で続けた。

どうも地声が非常に大きいタイプのようだ。

『それよりそっちは何処なんだ？今から俺が迎えにいくから、教えてくれないか』

「ええ、場所、ですか…」

漑は奈緒を見上げた。奈緒は無言で代わるようにといった仕草をしてみせる。漑は携帯を奈緒に渡した。

「ちょっと代わらせてもらったわ。あたしの家にこの子いるんだけ

どさ。こんな夜中に来られても迷惑だし、ウチでよかったら一晩くらい預かるわよ」

『いや、ああ、そうか…。かえって迷惑がかっちまうってんなら』

「それよりこの子、一体どうしたのよ？変なのに追っかけられてるってなんなの？」

電話の相手は一瞬どうしようか、そう考えたように間を置いたあとで、少し落ち着いた声で話した。

『…悪いが、電話でするような話じゃねえんだ。事情が話せないのは申し訳ないんだが…。』

あ、おれは山本浩輔っていいます、そいつは聖っていうんだ。』

「あたしは、安藤奈緒。お兄さん、こっちのことなら安心して。あたしたちは怪しいもんでも、その追っかけてるって連中とも無関係だから」

『こっちは怪しいもんでもねえってわけじゃねえんだけどな。すまねえ今日のところは、面倒掛けます、夜が明けたら、また連絡しますんで』

聖をよろしく願います。そう言い残して、浩輔からの通話は途切れた。

「…どうします？」

漣はなんだか妙なことになるやしないか、と奈緒を見詰めた。

「しーらね」

奈緒は伸びをするとぱちん、と携帯を閉じる。

「まあ明日になってみりゃわかるよ」

携帯を聖に手渡すと、奈緒はにっこりと微笑みかけた。

「お腹すいたよね？ごはん、なにか食べよつか？」

聖はうん、と頷くと、促されるままベッドから起き上がった。

熱

朝、妙な息苦しさを感じて漣は目を開いた。

隣では、昨日の少年が眠っている。体を起こすと腰に回された腕が外れて、漣は大きく息をついた。

『今日はお前がベッド使っていていいよ、俺はソファでも寝るから』
リビングにタオルケットを持ち込んで眠ろうとしたところ、聖が不満そうに声を上げた。

『なんで？一緒に寝ようよー』

聖はベッドをぼすぼす、と叩きながら言う。

『いいじゃないか、聖くんはちっちゃいんだし、二人でもそんなに狭くないだろ？』

奈緒の言葉に漣は渋々ベッドに上がる。聖は嬉しそうに腕を回して抱きついてくる。

『漣くん大好き！』

奈緒がくすくす笑っている。漣は頭を掻いた。

『なあ、お前ぜってー意味わかってねえだろ』

昨日会ったばかりの自分を、この少年は好きだと言う。それこそもうずっと前からそうだったような勢いで。

まだ目を覚ます様子ではない彼をじつと見つめた。心なしか、少し顔が赤いような気がする。

頬に手をそつと触れる、どうも熱があるようだった。

そつとベッドから抜け出し、リビングルームに行くと、奈緒が昨日の相手と電話をしているところだった。

気付いた奈緒が、「ああおはよう、零くん。聖くんはどうしてる？」と聞いてきた。

「奈緒さん、アイツなんか熱があるみたいだ。風邪でもひいたんじゃないかな」

奈緒は聖の具合がよくないらしいことを相手に伝えた。

『そうですか、…いや、こんな厄介ごとに巻き込んですまねえ。万が一家までつけられでもしたらおたくらまで巻き込みまうからなあ。どつか適当な場所かなにかないですか？ねえさんの都合のいい所でいいから』

「聖くんは連れていけないけど、あたしだけでよければ話がしたい。場所か、…ちよつと待って、」

奈緒が待ち合わせる店の名前と、場所を相手に伝える。しばらく何事かはなして、通話を切った。

「今からちよつと出かけてくるよ、聖くんのことばよろしくね」

身支度をしながら奈緒が言う。

「奈緒さん、ごめん。俺の責任なのに」

「今日、急に休みにしてもらえたんだ。運がいいんだよあの子」

奈緒は気にするな、と漣の肩をぽん、と叩いた。

「…そうだよな。後悔するくらいなら、初めから関わらなきゃよかったんだ」

「それは違うよ。君は悪いことをしたわけじゃないし、あたしは別に面倒だとは思ってないよ。」

それに君にはあの子を放っておくなんてこと出来なかっただろ？途中で放り出すくらいならはなっから拾ってきたりもしない筈だ」

そうでしょ？奈緒は漣の顔をじっと見ながら言った。漣はしばらくうーん、と唸るような声を上げていたが、やがて頷いた。

「買い被りすぎだよ」

奈緒はふつと微笑んだ。

「もしなんかあったら、俺も行くから」

「まあ、大丈夫だろ？多分。じゃあよろしくね」

漣は時計を見た。10時、もう街の殆どが機能し始めている時間だ。

「はあ、」

毎度のことながら、奈緒には頼りっぱなしの自分がイヤになる。

漣は体温計を持って戻った。

「聖、起きてるか？」

その声に、聖がぼんやりと目を開く。潤んだ両目が漣を見た。昨日のそれとは違い、発熱によるものだ。

「ちょっと腕出してみな」

熱を測る間に、漣は頭を冷やすものを探した。

洗面台でタオルを流水に浸して、軽く絞る。鏡に映った自分の目を、漣は意識して見た。

今までコンプレックスでしかなかった青い瞳が、ただ単純な意味で綺麗だ、と思えた。

聖が何度も綺麗だと言った、そのせいに違いない。こんなことは初めてだった。

けれども。いつもの習慣で、漣は黒縁の眼鏡を掛けた。

「奈緒さんがお粥作ってくれてるんだけど、どうだ？なんか食べれるか」

聖は頭を振った。あまり食欲がないのだという。そのうちにシャツの裾を掴まれて、漣は身動きが取れなくなった。

「なあ、冗談だろ。俺はお前の兄ちゃんじゃないぞ」

聖はじっとしているうちにまた眠ってしまった。

他人からの、好意を否定するわけではなかったけれど。

「俺、モテたこともないし…正直わけわかんねえよ」

奈緒はどうしているだろう。 湊は雨の降っている、窓の外を見詰めた。

お兄ちゃん

奈緒が指定した場所是最寄りの駅から数分にある。

小ぢんまりした店内では今の時間帯、それなりに客の姿があった。

中に入ると、奥の席にいた男がそれに気づいて奈緒に手を振った。立ち上がったその男が奈緒に向かって深々と頭を下げる。

「山本です、どうも」

山本、と名乗った男は、銀色のメタルフレームの眼鏡を掛けていて、短く刈り込まれた髪、やや派手な配色のシャツにスーツを着込んでいた。レンズには薄のものよりも、サングラスにほど近い色が使われている。

一見して、ごく一般的な様子ではない出で立ちに奈緒は少し戸惑った。

しかし、そんなそぶりは極力見せないようにしてわずかに微笑むと、彼に手を差し出した。

「安藤です。聖くんは、あたしが預かってるわ。もしなんだったら、電話でもなんでも掛けて確認して」

奈緒の手を、山本はぐっと握り返した。

「いえ、信用します。…ほんとに、申し訳ない」

山本に促されて奈緒は向かいの席に座った。奥まったテーブル席で、BGMやざわめきに紛れて聞かれたくない話でもここでなら出来そうに思える場所だ。

「昨日の雨で風邪を引いちゃったみたいだね。連れてくる訳にはいなくてさ。お兄さんは心配だろうと思うけど…。
今は濡くんって子が看病してくれてるから安心して」

山本はもう一度、ありがとうございます、と言って頭を下げた。

「ねえさんにはなんていったらいいか…、とりあえず、問題は解決したってどうか、その」

「問題って、」

テーブルにはウエイトレスから、二人分のコーヒーが運ばれてくる。彼女が立ち去ってから、奈緒は続けた。

「君らはどうして、一体なにがあつたのさ？…他人の事情に首突っ込むわけじゃないけどさ、聖くんのこと、あたしも協力できるならしたい。」

もしよかったら話してもらえないかな？」

山本はしばらく握りこんだ拳に力を込めたりして考え込むようなそぶりをしていた。

「…あ、いや、何から話していいもんか、つまんねえ身の上話になっちゃうんですが」

コーヒーを一口啜ると、山本は続けた。

「聖は、俺の弟分というか、俺が育てた息子みたいなもんなんです。今から10年くらい前だったかな……」

——山本は、アジトにしている廃ビルと化したリゾートホテルの一室で、相棒の木島が帰ってくるのを待っていた。

古ぼけたソファに身を埋めると、埃くさい臭いがした。ポケットを探り、紙巻煙草を口に咥える。ガスの切れかけたライターで火を点けると、

テーブルの上に放り投げた。

しばらくそうしていると、かたん、と奥の方で物音が聞こえた。木島が帰ってきたのかと思ったが、どうもそうではないようだ。

山本は灰皿に煙草を押し付けて、そうつと立ち上がった。音のする方へ目を凝らして見る。薄暗いなか、こちらへと近づいてくる足音が聞こえた。

なんだか様子が変だ。

その足音は、明らかに木島のものではない。ぺたぺたと、まるで子どもが歩いているような。

「何モンなんだ？」ここを使っているのは、たしかに自分たちだけというわけではない。他のメンバーの可能性も、また別のグループの可能性もあった。山本は木島か？と声を掛けてみた。

足音が、止まった。

薄暗い廊下に佇んでいたのは、まだ幼い子どもだった。3〜4歳くらいといったところか。

「なんだ、ガキか」

山本はふう、と息をついた。子どもに、「危ねえからあっち行つてろ」と追い払うようにする。

子どもは山本をじつと見上げたままぴくりとも動かなくなった。

見ると子どもはぼろぼろのシャツをどうにか羽織るように着ているだけで、そのうえ裸足だった。ガラス片などが散乱するホテルの廊下を

歩いて、傷だらけになっていた。

「おい、ちょっと見せてみな、坊主、足！」

山本はひょいと子どもを抱き上げる。ソファに座らせると足の傷を確認した。

「こりゃひでえな」

傷口に残る破片は幸いなさそうだったので、傷口を洗うと持っていた絆創膏でとりあえず手当してやった。子どもは顔をしかめるくらいで

泣きもせず、ただじつと耐えていた。

「…俺らの住んでるのは向壁、っていう小さな海沿いの田舎でさ、あんまり治安も良くないせいで暴力沙汰なんてしょっちゅうさ。捨てられてるガキなんかもそう珍しいもんでもない。まあ、俺も16で家出してあの町で今の親父に拾って貰ったわけだけど」

「…失礼だけど、お兄さんは何をやってる人なのかな」

山本は言いにくそうに頬を掻いた。

「まあ、人には言いにくい職業ってことで」

——子どもはすっかり山本に気を許しているのか、甘えたように身を寄せてきてそのままうとうとし始めていた。
調子が狂う。

また血が滲み始めた傷口が見えた。山本はそのぼさぼさの髪を撫でた。まだいくらかましなシーツを引きはがしてきて、そつと子どもの体を包み込んだ。

この子は親を亡くしたか、捨てられでもしたのだろう。別に珍しいものでもない。道にはそういった子が死んでいるのもよく見かけた。それに、自分で同じものを作っているのを棚に上げて悲しむのもどうか、と山本は自嘲する。

胸元にずん、と鉛のような重みがある。取り出して、引き金に指を差し入れた。

「よう、」

びく、と山本はその声に驚いて振り返った。そこには木島が立っていた。

「悪いな、遅くなっちゃった。って、お前何やってんだ？」

「何って」

木島は子どもが眠っているのに気付いた。
子どもがふ、と目を覚ます。

「なんだよ、コイツ」

「おい、やめろよ」

子どもを雑に扱おうとした木島に、山本は思わず叫んだ。

「いや、そんなガキ、放っておきゃあいいじゃねえかよ、金目のも
んなんかなんも持ってねえんだしよ」

「金になるもんなら、持ってるじゃねえか」

木島は冷たい笑みを浮かべた。

子どもの目が、恐怖で見開かれている。その金色に光って見える目
が、今度は山本を見た。

「…たしかに俺らは、金になるもんなんだってしてた。木島が言ったのは臓器売買のことさ。俺はあんま好きじゃなかったけど」

奈緒は少し暗い表情をしていた。山本はやめますか、と呟くと、奈緒は続けるように促した。

「そつから後のことは、正直よく覚えてない。気が付くと俺は事務所ので親父に頭を下げていた。

俺が面倒見るから、コイツをここにおいてやってってくれて、土下座して頼み込んだ。

親父は最初は渋っていたが、そのうちに折れた。元々どうでもいいことは、ほんとにどうだっていいって感じの人だからなあ。

聖っていうのは、俺が勝手につけた名前だよ」

「そつか、…大変だったんだね」

「まあ、犬や猫拾ったつてのとはわけが違っし、苦労するなんて判りきつた話つてもんでさ。

こついつちゃ何なんだが、ガキに興味なんかなかったしかわいいと思つたこともない俺が、なんでか聖を放っておけなかったんだ。

汚ねえ仕事をしてる俺に、兄ちゃん兄ちゃんって言つてひつついてくるんだよ。正直、自分のやってることが後ろめたくて堪らなかった。

だから、アイツにはせめて堅気の人間の暮らしをさせてやりたいなんて思つたりした」

奈緒は山本を見て、くす、と笑った。

「お兄さん、ほんとうに聖くんのこと大切なんだって、よくわかるよ。思ってたのよりずっと誠実な人だ」

「…おたくらとは住む世界が違うんだ、そんな買い被るのはよしてください」

山本は照れくさそうに頬を掻いた。

爆弾娘

「ねえさんは変わってんなあ。俺のことが怖くないんですかい？」

山本は、身の上話をしながら自分の生業がいわゆるやくざめいたものであることを告げているわけなのだが、奈緒がそれに動じる様子のないのを不思議そうに眺めた。

「ああ、なんって言うかなあ。そんな気にしてないや」

「なんですか、それ」

山本は苦笑した。奈緒は改めて目の前の男を見る。

確かに一見すると強面の若者なのだが、彼の人間らしい優しさを言葉の端々から感じる事ができた。

そつだとしても、彼のしていることに共感することはできなかったが。

「でも、あたしだって暴力はお断りだけどね」

「まあ、それは俺も否定しません。俺らのやってることは犯罪だし、親父も騙して大金巻き上げたり気に入らねえからって締め上げたりなあ。でもさ、

俺みたいな下っ端は黙って言うこときいてるしかねえんだ。俺の頭上じゃとんでもねえ大金がやりとりされてる。でも

俺には頭を上げてそれを見ることは出来ねえし、かといって下向いたまま歩くわけにもいかねえさ」

「聖くんは、普通の子に育てたいって、言ってたよね」

「アイツが18になったら、ここを出ようと思ったんです。聖にはこんな仕事はさせられねえってね」

「問題が起きたって、そのことなの？」

「ええ。ウチの親父と親交のある真山、つてのがいてさ、そいつが最近になって妙にウチの事務所に顔出すようになって。」

「目的が聖のことだったんですよ、アイツを金で売ってくれていてきやがったんだ。」

山本は思い出しながら忌々しげな表情に変わった。

「真山はここいらじゃ一番力を持つてるボスでさ、親父も昔に一度へまやって、そいつの世話になってる」

「売ってくれて、まさか」

「真山はアダルトビデオで稼いでる輩でさ。そういった趣味をお持ちの方々がいるんだってよ」

「…酷い話だ」

奈緒は顔をしかめた。確かに彼ならモデルとして不足はないだろう、でもまだあんな子供を。

「勿論俺は反対したよ。でも親父はそいつにどうしても逆らえねえんだ。だから、

とにかくここにいちやべえってんで、とりあえず聖を先に逃げさ

せたんだ。捕まったら最後だしな」

それが一週間前の話だ、と山本は言った。

聖は訳もわからず放り出されてここまで歩いてきたのだろう。奈緒は握った両手に力を込めた。

「俺が絶対助けるから、とりあえず遠くまで逃げろって言った。少なえけど金も持たせてよ。携帯は、…電池が切れちまってたみてえだな

まあお察しのとおり俺は親父にボコボコにされたよ。その足で真山の親父のところにも連れて行かれて、正直殺されるんじゃないかって思った。

最悪俺が死んでも、アイツが助かるならいいやって開き直ってたんだけどな」

山本はまだうつすら残っている殴打の痕をさすりながら言った。

「…それで、どうなったの？」

「真山の事務所できりあえず俺は、聖には手を出さないでくれ、俺はどうなったっていい、て叫んだんだ。鈍器を持った男にいきなり殴りかかれて、

それが精いっぱいだった。それから、気を失った」

山本は冷えたコーヒーを一口飲んだ。ふう、と息を吐く。

「知らない場所で目を覚ました俺は、とりあえず生きてるってことに驚いた。したら顔は腫れてるみたいだったけど、なんか手当がしてあるし、

なんか妙だな、ってさ。頭でも打っておかしくなったんじゃないか

って思った。

まあそれから色々あってさ…俺はこうしてここにいるってわけなんだけど」

「それじゃあ聖くんはそのヤバイ連中に追われてるのね、お兄さんはどうしたの？解決ってどういう意味なの？」

「まあなんていうか…まあ、その。なんだ」

言いにくそうに頬を掻いていた山本が、急にああ！と叫んで立ち上がった。その声に周りの客たちも山本を振り返る。

からん、と音を立てて開いたドアの向こうで、髪の長い少女が店内に入るのが見えた。

次の瞬間、

「あー！浩輔くん見つけ！」

店中の客が皆注目するような大声を上げて、その少女が駆け寄ってくる。山本にほとんど飛び掛かるような勢いでしがみつくと腕を絡ませた。

「捕まえたっ」

「っつて、桃っお前一体…やっぱお前俺に発信器かなんかつけてやがったんだな！」

「だってーパパが逃がしちゃダメって言ったんだもん」

奈緒が突然のことに固まっていると、山本はすんません、と言った。

「いきなりすみません。ああ、こいつは桃、っていうんですけど、なんか俺に一目惚れしたとかで、それ以来ずっとこうなんです」

桃、と呼ばれたその少女はうつとりしたような目で山本を見詰めている。この様子はなんだか見たことがあるぞ、と奈緒は思った。

「真山の事務所でボコられに行ったとき、俺を助けてくれたのがコイツなんです。真山も、可愛い一人娘には弱いんだな。俺と聖のことは、水に流すって言ってた」

桃は顔を上げると、奈緒の方を見た。

「こーちゃん、この女の人だれ？」

「ああ、ほら言っただろ、聖を助けてくれた恩人だよ」

「あーそーなんだっ、あ、私、真山桃っていいいます！はじめまして！」

桃は奈緒にちょこん、と頭を下げた。

「はじめまして。あたしは、安藤奈緒よ、可愛いお嬢さんじゃない」

「冗談じゃないっすよ。なんか俺コイツと結婚前提でおつきあいするように強制されてるんですよ」

山本がため息交じりに呟いても、桃は全く気にもとめない様子だった。

可笑しくて溜まらずに奈緒も笑った。

「で、今回の件はこれでおわりつてはなしなんだが、今もまだ聖のことを追っかけまわしてる連中がいるんだ。

単にウチの事務所や俺の親父が気に食わねえって奴らだな。親父はほとぼりがさめりゃあ静かになるさって、その間俺も家には帰れねえんだよ」

「だから家に住めばいいじゃん、こーちゃん住むところないんでしょ？」

「そーゆー訳にいかねえって！」

「お兄さん、大変そうだね」

奈緒は少し考えてから、山本を見た。

「ねえ、あたしお願いがあるの。聖くんに、友達の家にお泊りしていいって許可をもらえないかな？」

「え、ねえさん、」

「ほとぼりが冷めるまで、あたしんちで匿ってあげようってことだよ」

「そんな、…迷惑ばっかかけられませんか」

「今の状況はしんどいし風邪が治ってからの方がいいでしょ？」

どうしたものか、と山本はうつむき加減になった。

「…すまねえ、実を言えば俺もまだ聖を迎えにいけるような状況じゃねえんだ。…でもねえさん、ほんとにいいんですかい？俺らみたいなもんと関わりたくねえって普通はなるもんだ」

「だから、お兄さんは別だつて。まあ、こつちにはそれで別の問題があるみたいなんだけどねえ」

「へ？なんのことです？」

奈緒は苦笑して、いや、こつちの話。そういつて笑った。

「それじゃあ。長いこと話し込んですいません」

山本は奈緒に頭を下げた。

「お姉さん、またね！」

桃が元気よく手を振る。

奈緒も笑顔でそれに答えた。

携帯をカバンから取り出す。

「遅くなっちゃってゴメンね、遷くん。聖くんの具合はどうかな」

『奈緒さーん、早く帰ってきてくださいよー』

携帯からは溼の情けない声が聞こえた。
奈緒はくすつと笑う。

「ねえ、帰ったら昨日のパーティーもう一回やり直そうか。お兄さんがね、ケーキ買ってくれたんだよ。
聖くんは甘いものが大好きなんだって」

『聖のこと、どうなったんですか？』

「それは帰ったら話すよ」

奈緒は通話を終わると、空を見上げた。
雨上がりの雲の間からは、太陽の光が差し込んでいた。

ガラス玉

漣の部屋で、読み散らかした雑誌の類を聖は積み重ねて、隅へと押しやった。

急にお片付けを言い出して、とりあえず散らかっているのがここだったのだ。

きれいになっているのかいないのか。同じように部屋の隅へと追いやられた漣は、別の求人情報誌を手に様子を伺っている。

聖のカバンも、口を開いたまま放置されていた。

中から、何個かビー玉が転がりだしている。

漣はその内の一つを拾い上げた。透き通った青いガラス玉。手の平の上で影を落としている。

どうやら気が済んだと見える、聖が漣を振り返った。

今の彼はだばだばの灰色のスエットを着ている。漣の服は、聖には少し大きすぎるようだ。

聖は漣の目をじっと見詰めると「漣くんの目の色って好き」と言った。

手の中のビー玉と似たような色をしていた。

心なしか潤んでいるように見える、聖の目はどこか金色に近く光って見えた。

「お前の目ってさ、不思議な色してんな」

漣が聖の目を見返すと、何故だか急に恥ずかしそうな表情に変わった。

た。

「…おいおい」

聖は真っ赤になって、そばにあった雑誌で顔を隠した。

「…恥ずかしいよ、澪くんのばかつ」

「っなんだよ、お前人のこといえねーだろっ」

聖は床にこてん、と寝転がったまま雑誌を被り、そのまま固まって動かなくなった。

——なにか妙なことを言ってしまったのだろうか？
いやいや、と軽く頭を振る。

聖は自分の目の色が気に入っていないのかもしれないな、と無理やり納得させて

澪は雑誌に視線を戻した。先日、バイトを辞めたばかりで次を探している最中なのだ。

本音を言えばちゃんとした就職先をみつけたかったが、それは無理だろうと早々に諦める。

がちゃん、と鍵の開く音が聞こえた。

「ただいまー」

奈緒が帰ってきたようだ。聖は起き上がると玄関まで走っていった出迎える。

「なおちゃん、おかえり！」

「おーよしよし。元気になったねー」

奈緒は聖の頭を撫でた。

げんなりした様子の漑も、のそのそリビングに移動した。

「聖くん、ちゃんとお手伝いしてただろ？」

「あー、もう、俺の部屋で本で遊んでただけですよ。掃除してるつもりなんだろうけど」

奈緒はその言葉にむくれた顔の聖に笑いかけた。

「ね、今からご飯作るの一緒にやろうか。聖くんが手伝ってくれると助かるんだ」

うん、と聖はうなずくと、今度はキッチンまで駆けていった。

「いい子でしょ？」

ああ、と漑はうなずく。

「子どもの相手とか、慣れてないから疲れるけど」

「にぎやかでいいじゃないか」

言いながら、奈緒もキッチンへと向かう。

夕食の後片付けを、やりたいと言い出した聖に任せると漑と奈緒はリビングに移動した。

「ごめん、奈緒さん。当分バイト代入んないから、家賃払うの遅れるかも」

「律儀だね君は。そんなの何時だっていいのに」

「そーゆう訳にはいかないよ」

「君はしっかりしてるから、信用してるよ。それに今は君が家であの子を見てくれるから助かってるんだし」

聖の持つ複雑な事情は、奈緒の口から聞かされた。

正直そこまでややこしいことになっているとは澪も思っていなかった。

それでも奈緒は聖のことを受け入れてくれた。まるであの時の自分と同じように。

聖の風邪が治ってからはまた、澪は同じベッドに寝る羽目にあっている。

澪は、奈緒の借りているマンションの一室を、自分専用の部屋にして貰っていた。

そして家賃として奈緒に、契約する気でいた部屋での料金を渡していた。

元々借りる予定だった部屋の規模を考えると、食事や風呂までついているのだから返って安いくらいだ。

ふっと、気にかかったことがある。

あの時、奈緒はすぐに澪のための部屋を一つ開けてくれた。物置になってたから、そうは言ったが、いうほど物が置いてあるわけでもなかった。

ここは奈緒が一人で暮らすには少し広すぎるような気がする。

「ねえ、奈緒さん」

「ん？」

「奈緒さんには、家族っている？」

「うん、離れて暮らしてるけど。両親とも元気にしてるよ」

妙な間があった。

「…そうじゃなくってさ。あ、…ごめん。変なこと言った」

「ううん。気にしてない」

聖が呼ぶ声がして、奈緒はカウンターの奥に消えた。

漣は、軽はずみな気持ちで口に出した言葉を後悔した。

奈緒の今の生活、というか、女性のような見た目や仕草は、明らかに一般的な男性としては異なる。

偏見なんかも、今でこそ公にそういった人々が認知されているにしろ、それなりにあるはずなのだ。

奈緒にもなにか、聖のように複雑な事情があるのかもしれない。

「バカか、俺は…」

漣は頭を掻いた。

ポケットに違和感を感じて手をつ突っ込むと、中には聖のビー玉が入っていた。

青いガラスの玉を、澪は手の中で転がしている。

片づけ物を済ませた聖がそれに気づいて駆け寄ってきた。

「それ、澪くんにあげる」

「ありがとう」

聖は照れくさそうに笑った。

「澪くん、一緒にお風呂入ってきなよ」

奈緒がそう言うのと、何故だか聖が嫌だ、と言う。奈緒の後ろにまわると、澪から身を隠すようにした。

「僕なおちゃんと一緒に入りたい」

「なんでさ？澪くん好きなんですよ？」

また、聖の顔が真っ赤になった。

「どした？」

「…恥ずかしい」

奈緒の背中に顔を押し付けて、再び聖は固まってしまった。

「漣くん、一体なにしたの？」

「えっ、心当たりないですって！なに恥ずかしがってんだよ」

奈緒は聖の髪をそうつと撫でた。「いいよ。じゃあ着替え取っておいで」

聖はそろそろと、漣の方を見ないように走っていった。

「…アイツ何意識してんだか」

「複雑な年頃だねえ」

ニコニコしている奈緒が、ほんの少し寂しそうに見えた。ただの、気のせいだったのだろうか。

今日は別々に寝るようになるかな。と、漣は自分の部屋に横になれるスペースを開けると、クッションを枕代わりに床に寝転んだ。

デート

聖が来てから一週間が過ぎた。あつという間だった気もするが、彼はその間家からは一歩も出ることはなく身を潜めて暮らしている。

漣の隣で、クッションを抱えて寝そべっている。呑気に居眠りをしている聖はこの生活に不満を言うことはなかったが。

そつと、髪を撫でてやった。聖が目を開く。

寝起きのぼんやりした顔を漣に向けた。

「なおちゃんは？」

「お兄さんのところだよ」

奈緒は山本に会いに出かけている。あれ以来、ほとんど毎日のように。

「なんか気が合うんだよねえ」なんてことを言っではいたが、普段から漣には嫌なものを見せないようにしているところがあるので詳しいことはわからない。

聖はさっきのクッションの代わりに今度は漣に抱きついてまた眠りはじめた。

そのいう、お兄ちゃん、を漣は直接会って見たことはなかったが、聖から写真で見せてもらった。携帯で撮影されたものだ。

「ひとりで寂しいときに見てる」と言っていたその人は、たしかにそんな生っちょろい気持ちなんかは

軽く吹き飛ばすような迫力を備えていた。

すやすやと寝息を立て始めた聖を見た。

「泣かしたら、殺されるんじゃないか…俺」

漣は身動きが取れずにはあ、とため息をついた。

「ねえ漣くん、お願いがあるんだけど」

珍しく晴れた日で、どうにか午前中に目を覚ました漣に奈緒が言った。

「え、なに」

「今日は天気がいいからさ、聖くんを外に連れてってあげてほしいんだ」

「…いいですけど、大丈夫なんですか？その、」

「聖くん、おいで」

奈緒が呼びかけると、隣の部屋から聖が顔をだした。

「へえ…」

聖は、腰まで届くロングのフルウィッグを着けて帽子を目深にかぶっていた。

年齢の割には小柄で、どちらかと言えば目が大きくて可愛い顔立ちにそれがよく似合っている。

服装はいつもと同じシャツにジーンズ姿だったが、言われなければ誰も男の子だとは思わないだろう。

「ねえ澪くん、これって変じゃない？おかしくない？」

「変じゃないよ。似合ってんじゃない？」

聖は奈緒の背中に回り込んで身を隠した。

「ね、可愛いでしょ？女の子にしかみえないから大丈夫だよ。デートしておいで」

「最初のは同意しますけど、デートは勘弁してくださいっ」

奈緒に突き出されて聖は澪の前に立った。

やや明るめの色をしたふわふわの長い髪の毛、ほんとうに普通に可愛らしい女の子だと思った。

「まあついでといっちゃあなんだけど、晩ご飯の買い物よろしくね」

最後は半ば押し切られる形で、澪は聖を連れて家を出た。

「あんましゃべんなよ、ボロがでるから」

「うん」

聖と腕を組まれた澪は、知り合いが通りかからないことを全力で祈った。

「…あのね、お兄ちゃんがもう戻ってこいって言ったの」

少し控えめの声で、聖が言う。

「…そっか、じゃあもう普通の生活に戻れんだな。よかったじゃないか」

聖がぎゅっ、と腕を締め付ける。見ると今にも泣きだしそうな目をしていた。

「やだなあ。僕ずっと澪くんと一緒にいたいよ」

涙がぽとぽと、とシャツの上に落ちる。

「また、いつでも遊んでやるから」

泣くなよ、と言うと聖は頷いた。シャツの袖口で涙を拭う。

丁度通りがかったゲームセンターの前で、可愛いぬいぐるみが展示されていた。

「どうする、ちょっと遊んでくか？」

聖の気分を上げようと、澪は中に入った。UFOキャッチャーのなかにはなにやらデカいぬいぐるみが入っている。

「可愛い！」

その、ウサギなのかなんなのかはわからないがふてぶてしい顔をした饅頭のような白い物体を

聖が夢中になって見つめている。

取れる自信はなかったが、漣は硬貨を入れるとアームを動かした。表情の割には素直に引っかけた饅頭は、一回で手に入れることができた。

「あげるよ」

聖がぎゅ、とぬいぐるみを抱きしめる。

「ありがとう」

「よろこんで貰えたならなにより」

「…家に帰って、寂しくなったらこの子に慰めてもらおう。この子の名前、れいちゃんってよんでもいい？」

「それはやめてくれ…」

漣はげんなりしたが、聖の機嫌を取ることはできたようだ。

「つーかもう、さっさと買いもんして帰るぞ！」

「はい」

ゲームセンターを出て、スーパーのある通りに差し掛かった。当初の約束はもう頭にはないようで、いつも通りのテンションで聖が喋っている。

「あのね、今日はなおちゃんなんでも好きなもの作ってくれるんだって」

上機嫌で歩いていると、急な突風で聖の帽子が飛ばされた。

「あー!」

追いかけてようと、慌てて駆けだした聖は通りすがりの人に衝突した。

「…っ、ごめんなさい!」

その拍子にぬいぐるみも落としてしまったらしい。

ぶつかられた女の方は、ぬいぐるみを拾い上げると軽く汚れを叩き落とした。

ずっと、ぬいぐるみを聖に差し出す。

全身黒づくめのドレス姿に、肩までの黒髪が揺れていた。

露出している肌の部分が、まるで陶器のように白い。黒い服は、喪服のようにも見えた。

「…きれいな目、」

聖がそうつぶやく。

その女の方は、聖を見て何故か驚いたような素振りをみせた。

「あなた…」

「何してんねん、はよ行くで!」

連れ合いらしき男性が声を上げる。

「気をつけなさい、」女性はそうとだけ言って立ち去った。

「クレア、置いてくで！」

気の短そうな声が再び掛けられる。

座り込んだままの聖を遷は手を掴んで立ち上がらせる。

「聖、だから急に走ったりすんなって。めーわくだろ」

「…いい匂い」

聖は人形をぎゅう、と抱きしめた。

さっきの女性の匂いに移りこんでいるようだ。

「ねえさんは人が良すぎるんですよ。金ぐらい受け取ってもらわねえとこっちの気が済まねえ」

山本が苦笑する。今回呼び出したのは山本の指定した店で、そこは酒も提供しているところだった。

「いーんだよ。それに今日は奢りなんだろ」

「聖のこと、ほんとに長いこと世話になっちまって…お礼と言っちゃあなんですがね。でもねえさん、強いからなあ」

「あはは」

未成年とは一緒に呑めないからさ、といいながら奈緒はグラスを空けた。

「…俺の方は、なんとか丸く収まってさ。まあいっちゃんあ半分以上桃のおかげなんですけどね」

桃は真山の「目に入れても痛くない」一人娘だ。その上あの勝気な性格で、山本や聖に手を出すような命知らずは殆どいなくなった。

「聖のヤツ、もう戻って来いっていったら泣きやがって。アイツ、ちゃんと賤けてるつもりですけど、あんまりわがままいうようでしたら

シメてもらって構いませんから」

「あの子は、いい子だよ」

奈緒は笑ってそう答えた。

「あのさ、7月にはお祭りがあるでしょ。聖くんも一緒に連れてっていいかな」

「ええ、願ってもないことで。俺が行っちゃあ周りが引いちまうし」

「お兄さん、屋台かなんかやったら見栄えしそうなんだけどねえ」

やめてくださいよ、と山本が言う。

「電話の声でもわかります、アイツ、ねえさんらといるのが楽しいんだって」

「いいなあ、あたしも聖くんみたいな子どもが欲しいわ」

「そういつてもらえるんが、一番うれしいです」

山本はそれこそ普通の父親のように、目を細めて笑った。

「ミ」

長雨の季節も過ぎ、蝉の鳴き声が耳につくようになった。

開け放した窓からは、冷たい朝の空気が流れ込んできている。

寝返りをうつて、ベッドの広さに改めて気付いた。そこにはもう、聖はいない。

「ああ、おはよう澪くん。今日は随分と早起きじゃないか」

奈緒は出かける用意をしていた。それ以外の物音はたたず、なんだからしん、と静まり返っている。

「…やっぱり、寂しいね。なんか」

「うん、」

二人とも考えたことは同じだった。目があつて、奈緒が笑った。

「あのさ。俺、考えたんだけど、…仕事。親父のところにさ」

奈緒は手を止めて、澪を見た。なんだか言いづらくなって口ごもる澪の肩にそつと手を掛ける。

「うん、がんばれ。そういうのも別に悪いことじゃあないよ」

「なんか移転して規模が大きくなるとかでさ。若干名職員募集とか

してるみたいなんだ」

「漣くんがやりたいって思ったんならやればいいんだよ。まだ若いんだしさ、

やって後悔なんかいくらだってすりゃあいいんだ」

「…ありがとう…って、雇ってもらえるかどーかまだ分かんないんだけどなあ」

そりゃそーだって、さびしいこというなよ、奈緒はそういつて、こんどはばしつと肩を叩いた。

家を出る前に、漣を振り返って見た。

奈緒の表情がどこか暗いように思った。

「ねえ漣くん、あたし、今晚ちょっと付き合ってほしいところあるんだけど、いいかな？」

「え…いいですよ、どしたんですか？」

少し間をおいて、よかった、と言った。

「じゃあ、行ってくるね」

ばたん、と閉まるドアを見送る。漣は首を傾げた。

「どうかしたかな、奈緒さん」

何時もより早く帰宅した奈緒は、着替えると

「散歩に行こうか」と漣を連れ出した。

「今日はどうしたんですか、奈緒さん」

「うん、たまには外でご飯食べるのもいいかなあって」

そういつて、暗くなってきた外を二人で歩いた。

駅の近くにある店で食事を済ませると、辺りはもう真っ暗になっていた。

「もうちょっと、散歩してもいい？」

漣は頷いて答えた。あえてなにも聞かなかった。

駅前通りの賑やかさからはだいぶ離れて、殆ど人の影もない道に出た。

疎らな街灯が照らしている寂しい道に行く。

奈緒は適当に歩いているのだろうか？漣はその横顔を見た。

会話は途切れがちで、奈緒はいつもどこか様子が違っていた。

やがて二股に別れるところに、何かを祀っている祠のようなものがあった。

「休もうか、結構歩いたし」

奈緒は祠の隣の、大きめの石の上に座った。

「…なんか、出そうですね…」
「雰囲気のある場所に漣が肩を竦める。」

「うん、…会えないかなあ、なんてさ」

「奈緒さん？」

「冗談だよ、そういつて奈緒は笑った。」

「…なんかね、君には、話したい気分になったんだ」

漣も奈緒の隣に座る。

「奈緒さん、様子が変だし、気になってたんだ」

奈緒はカバンの中の定期入れから、一枚の写真を取り出した。
街灯に照らされたそこには、子どもを抱いた女性と男性が写っていた。

「奈緒さん、これって、」

「うん、僕と、…妻の写真だよ」

奈緒の口調が普段と違うものになっていた。

「奈緒さん？」

「ああ、ゴメン。僕はこっち。この女の人、ユミコだよ」

「え!？」

漣は写真の男性と、目の前の奈緒を交互に見比べてみた。

穏やかな笑みを浮かべた地味な印象の男性、よくよく見れば、奈緒に似ているような気もする。

しかし、言われなければ誰もが、髪の高い女性の方を奈緒だと思うだろう。

「ユミコさん？」

「…もう、5年くらい前になるのかなあ。僕はね、この女の人。ユミコっていうんだけど。」

彼女と結婚して、その次の年に娘が産まれたんだ」

写真には小さな女の子がこちらを向いている。

「可愛いですね」

「ありがとう」

「…あの、奈緒さん、この人は、今は」

奈緒はなにか言い出そうとして、声を詰まらせた。ぐっと、握りこんだ指に力を込めている。

「…事故だったんだ。僕が病院に着いたときには、もう、

——その日は、遅くなるからって電話した。ユミコは、頑張ってたね、

って言つてさ。それつきりだよ。

娘を連れて、買い物に行った帰りに車が突っ込んできてさ、即死だったんだって。

娘はまだ生きてたけど、その日の夜に亡くなった。

僕はそれから、頭の中が真っ白になっちゃって。なんにも覚えていないんだ。お通夜とか、葬式とか、いろいろあつた筈んだけどね。家に帰って、二人の服とか、子どもの玩具とか、片づけてたんだ。もう、使ってくれる人が居ないから…。

ユミコの部屋の鏡台の前で、僕は、どうしたらいい？って、鏡の中に映った僕に聞いてみた。

…あのころは、僕は見た目どおりに頼りなくって、いつもユミコに引っ張ってもらわなきゃなんにもできなかったんだ。

彼女はとても強い人で、他人に優しくてさ。

いつもみたいに、しっかりしなよ、奈緒！って、言っただけだったんだ。

最初はただの好奇心だった。やりかたなんてなんにもわからないくせにさ、

ユミコの使ってた化粧品に手を出した。

僕は地味な顔だったから、思い出せるままのユミコを思ってたなら、なんか彼女に似せれてるような気になった。

彼女みたいに、強い人間になれたような気がした。

だんだん化粧もうまくなってさ、髪も伸ばして、しゃべり方までそっくり同じに真似してさ」

「…奈緒さん、」

話しながら、奈緒が泣いているのに涙は気付いていた。

「それからは、いつも、彼女だったらどうしてただろうかって思いながら生きてきたんだ。

僕は、正しいことをしてるんだろうかって、不安でたまらないから」

漣は項垂れた奈緒を見た。

「ユミコさんのことを、思ってたのかもしれないけど」

奈緒は顔を上げて漣を見た。

「俺や聖を助けてくれたのは、奈緒さんだよ」

「…ありがとう」

漣は、奈緒が落ち着くまでの間黙って肩をかしていた。

——あなたは完璧な人で、自分みたいに迷ったり、下らないことで落ち込んだりなんかしないんだって、思い込んでたんだ。

「…ごめんね、」

「謝ることなんてないよ。なんか、嬉しかった。…変な言い方なんだけどさ。

俺でよかったら、いつでも話聞くから」

「ありがとう」

帰ろうか、そういつて、奈緒は再び写真を大事そうに仕舞い込むと、立ち上がった。

青

久し振りに、聖が家にやってきた。学校が長期休暇に入ったのだという。

「澪くん、僕一人でここまでこれたんだよ」

バスに一人で乗るのは初めてだったらしく、やや興奮気味にそう訴えてくる。

中学生にしてそれもどうか、とは思ったが、聖にしては上出来ではないかと澪は思い直した。

「まあ、よかったじゃんか。迷子にならなくて」

そうとだけ言った澪に不満そうに頬を膨らませた聖の髪を、苦笑しながら撫でてやった。

奥から、奈緒がやってきた。

「よく来たね。元気そうでよかった。ずっと、どうしてるか気になってたんだ」

「奈緒ちゃん」

「ほら、上がって」

聖は手土産に持ってきたお菓子を奈緒に差し出した。
お茶にしましょう、そういつて奈緒はキッチンの奥へと消えた。

聖は澪がいつものだらしないスエット姿でないことに気が付いたらしい。

「澪くん、どこか行くの？」

「うん、澪くんはね、今日はお仕事なんだよ」

「えー、つまんない」

「そんなに遅くならないから、ちよつと引越しの手伝いするだけだし」

奈緒は聖を慰めるようにぽんぽん、と背中を叩いた。

「澪くんが帰ってくるまで、あたしと遊ぼつか」

「うん、…澪くん、いつてらっしゃい」

「ごめんな。バイト代入ったらなんか奢ってやるから」

父親の務める会社に誘われて、とは言っても。父が澪に紹介したのは移転作業の手伝いのバイトだった。

ダンボールに詰められた荷物をトラックに運び込むだけなのだが、中で見聞きした全てのことについて、公言しないこと。そんな書類を書かされた。

そこは製薬会社の研究部門なのだ。

同じように作業着に着替えた若者が、それぞれの割り当てられた場所で作業を開始していた。

澪が建物の中に入ると、窓の外、木の影に立つ不審な人影を見つけた。

白衣を着ている。研究所の人なんだろうか？

近づく、彼は一人でなにやらぶつぶつ呟いている。

「あの、すみませんが何やってるんですか」

声を掛けるとびく、として澪を振り返る。やや動揺を隠しきれない様子で男が言った。

「いや、怪しいものじゃあないんだ、安心してくれ」

「（…怪しい、）」

「ん、そうか。じゃあもう少し。終わったらまた連絡をくれ。私は少々場所を変えましょう」

手元に向けてまた何事か呟くと、男が移動を始めた。その先には似たような白衣の一団が屯している。

「あ、ちよつと！」

「いや、心配はいらない。ちよつと何者かに気付かれたただけだから。君は自分の仕事に集中してしてくれ、さくら君。

…ところで木を隠すなら森の中、私を隠すなら白衣の中ってね」

最後は澪に向けて呟きながら。確かに彼は似たような恰好をした集団に紛れて、見分けがつかなくなってしまった。

「何なんだよ…一体」

気を取り直し、自分に割り当てられたエリア内で作業を始めると、ずっと何かが横切るのが見えた。

慌てて目で追うと、そこには中学生くらいの子どもがいた。漑の存在に気付いた彼が立ち止まってこちらを見ている。

その子はサイズの合わないぶかぶかの白衣を着ていた。

子どもが、なんで？

考えているうちにまた走り出して、彼はどこかに行ってしまった。

すぐ近くでドアの開く音がした。中にはまだ職員が作業をしている場合があるので、邪魔をしないようにとも言われていた
漑は、扉の前から移動した。

「あら？」

中から白衣の女性が現れた。肩くらいまでの黒い髪、白衣の中には黒い衣服を着込んでいるらしかった。

その青い目が漑を見つめている。

「また会ったわね」

女性は僅かに微笑んだ。彼女はどうかやら漑を知っているようなのだが。

「…あの、僕、あなたに会ったことありましたっけ？」

「覚えてないかしら？あの、一緒にいた男の子はどうしてるの？」

「…ああ！」

少し前、聖と外出した時に、ぶつかったあの女の人だと気付いた。
…そういえば。

しかしあの時、たしか聖は女の子に変装していたはずなのだが。

「あんた、一体…」

たしか、連れ合いにクレア、と呼ばれていた。その女性が漣との距離を詰める。

「まさかあの子がまだ生きてるだなんて、思いもしなかったわ。とつくに死んでるものだと思ってたのに。」

あなたが、あの子の面倒を見ているのかしら？」

漣が何も言えずに言葉に詰まっていると、クレアがさらに顔を覗き込むようにしてきた。

「もしかして水谷の居所を？あなたは彼と何か関わりがあるの？」

「俺は何も知らない！聖を育てたのは俺じゃないし、その水谷なんとかっていうのも知らないよ、人違いじゃないのか」

クレアはそつと離れると息を吐いた。

「あなたは、何も知らないのね？」

うんうん、と澪は頷く。クレアは顔に掛る髪を掻き上げた。

「見間違えるはずないわ。聖なんて、名前まで付けてるのね。それよりも、その子はどこに居るの」

「もう、俺には関係ない話っすよ!」

「あなたが本当に何も知らないのなら、その子とはもう関わりになるうとしない方がいいわよ。」

私と会ったことも、普通に生活していたいのならね」

「…物騒な話だな」

クレアは作り物みたいな顔に冷たい笑顔を浮かべた。

「アンタこそ一体何者なんだよ?」

「私はただの職員よ?表向きだけだね。ここには一部の人間以外知らない秘密があるの。」

あなたはそれに関わろうとしているの、でも。その子を引き渡せば悪いようにはしないわ」

「何言ってんだよ、聖がなんだってんだ」

「水谷とグルじゃあないのね、本当に、何も知らないんだわ。その子は人間じゃあないのよ」

クレアはふっと笑うとどこかへと行ってしまった。

人間じゃあない？

漣はその言葉の意味がわかるまでの間、呆然とその場に立ち尽くしていた。

「って、何、何言っただあの人。そんなわけないじゃないか」

ふと見ると、先ほどの少年が再び漣の前に現れた。背中にリュックのようなものを背負っている。

じっとこちらを見つめるその子は、どこか聖に似た顔立ちをしていた。

若干目が座っていて、髪の色が違っていたが。

「あ…」

ぎゅ、と作業着の裾を掴まれて、引っぱられる形になって漣は歩き出した。さながら案内されるかのように。

しばらくするとまた、あの怪しい男が待っている木の陰に着いた。

「なにか面白いものでも見つかったかな？」

声を掛けられた少年は男の方へと駆け寄る。

「ん、どうかしたのかさくら君」

さくら、と呼ばれた少年が漣を指差す。

「クレア」

男がはっとして顔を上げた。

「クレアと話してた。ダディ、この人なにか知ってるよ」

さくらの渡したリュックをどさり、と落とすほど、明らかに取り乱した男は

漣に詰め寄ると両肩を抱えた。

「君は…」

その、分厚いレンズの向こう側の両目が真剣な色をしている。

「アンタがもしかして…水谷？」

「何故、私のことを」

漣は首を振った。

「クレアが言ってた水谷っていうのは、アンタのことなのか？」

水谷は漣から手を放すと、荷物を拾い上げた。

「ここじゃあなんだ。私の研究所へ案内しよう」

どこかへと歩き出す水谷にどうしたものかと漣が戸惑っていると、さくらが駆け寄ってまた裾を掴んだ。

「ついてきなよ、おじさん」

「って、おじさん!？」

くるつと体を反転させてさくらは男に駆け寄る。 零もその後が続いた。

秘密

やたらと振動する車に乗せられて、漑は水谷のいう研究所へと向かった。

知り合ったばかりの、怪しい男なのだが。何故だか不安は感じなかった。

それよりも気がかりな事がある。

「なあ、アンタん家つてもうちよっとかかんの？」

「どうかしたのか？」

「あー、ダメだ！せっかく仕事が見つかったのに！」

「仕事の内容に嫌気がさしたバイトが逃亡、何、よくあることだ」

「ねーよー!!」

漑ははあ、とため息を吐く。後部座席でスナック菓子を食べながら、さくらが「あきらめが悪いよ、おじさん」そう憎まれ口をたたいた。

辿り着いた先にあったのは、一軒の寂れたラーメン屋だった。

街並みから外れた、高架下に構えられている。しかし全く営業している風ではない。

「…ちよ、」

「さあ、着いたぞ」

「俺、アンタと飯食いにきたわけじゃないんだけど」

「何をいう。ここは私の研究所兼趣味で営業しているラーメン店だよ」

「…なんか、色々突っ込みたいことがあるんだけど」

促されるまま漣は店内に足を踏み入れた。

中はテーブル席が3つにカウンターのこじんまりとしたつくりで、綺麗に保たれてはいるものの、

返って客の気配なんかは全く感じられなかった。

さくらが水の入ったコップをとん、と目の前に置いた。全くの無表情で、無愛想な店員である。

「話をする前に、腹が減っているだろう。何か作るよ」

水谷が厨房の奥へと入る。さくらがテレビのスイッチを入れた。

なにやらお気に入りらしいアニメに見入っている。

しばらくたって、奥から異様な臭いが漂い始めた。

「さあ、出来たぞ」

漣とさくらが待つカウンターの上にどん、と置かれた丼には、青緑色のどろりとした液体に塗れた何か、が入っていた。

漣が覗き込むとチャーシューやネギといったそれらしい具材を確認することができたが、尋常でない臭いが

ラーメンであるということを否定している。
漣が戸惑うのを通り越して固まっていると、水谷が不思議そうに声を掛けた。

「どうした？さあ、遠慮することはないぞ」

「…すみません。俺、やっぱり人違いしてたみたいで」

隣では、さくらが表情一つ変えずに麵を啜っている。それを見て、漣は恐る恐る一口、口に含んだ。

「うげっ…」

口に入れた物体をどうにか吐き出さないように、それを体中が拒否しているのを感じたが
気合で飲み下す。

胃の奥から上がってくる臭いで再び吐き戻しそうになった。

漣は涙目で水谷に訴えかける。

「何すかこれ！」

「？、どうかしたのか？」

「どうかしたじゃなくて、マズすぎるだろ！こんなラーメンじゃねえよ！」

「そうかな？」

水谷は漣が突き出した丼を受け取ると、一口啜りこんだ。
見る間に青ざめた水谷はちょっと失礼、そういうと流し台へと駆け

込んだ。

隣ではさくらがずるずると麺を吸っている。

「いやあ申し訳ない。どうやら少々失敗してしまっていたようだ」

口元を拭いながら水谷はそう言って笑った。

「俺は別にその、アンタの作るラーメンを食いに来たわけじゃないから」

「君は、クレアとは知り合いなのかい？」

「俺は何にも知らないですよ、あの人、なんか妙なこと言ってたけど」

ふうん、と、水谷は考え込むような素振りをみせた。

「あそこでアンタと会ったのも偶然だしさ。…正直これ以上厄介ごととに巻き込まれるのはゴメンだよ。」

俺は普通に暮らしてただけなんだ」

「まあ、君がそう思うのも無理はない。だがどうも、君はそういう厄介ごとに巻き込まれるのが運命なんだよ、雨宮くん」

「運命とか…って、あれ？俺アンタに名前言っただけ」

「ああ、まあそんなことはどうでもいい。ところで、君のお友達はこんな顔をしてるんじゃないかね？」

水谷はさくらを抱き上げる。

さくらは無愛想な顔を澪に向けたが、やはりどこことなく聖に似た顔立ちをしているように思えた。

澪は何も言えなかった。それがどういう意味の言葉なのかが理解できないでいる。

さくらを降ろすと、水谷はついておいで、と言って店の奥へと消えた。

澪もその後をついて行った。

奥にある扉を開くと、そこにはまるで何かの研究施設のような光景が広がっていた。

厨房と合わせた店内よりも広く、今朝方に見た製薬会社のものとさして変わらないほどの立派なものだ。

「すげえ…、アンタ本当に一体何モンなんだよ？」

「私は見ての通り、ただのしがないラーメン屋の主人だよ。今はね」

水谷は奥へと進み、壁に添えられた何かの機械にそつと触れた。

「私はもうあの研究からは手を引いたんだ。人として、やってはいけないことだと判断した。

彼女らはまだ諦めてはいなかったんだな。私のことも。このまま放っておくつもりはないらしい」

「あの会社には秘密があるって…、それに、アンタは関わってたんだな」

水谷は頷いた。

「10年ほど前になる。この研究を続けることに嫌気がさした私は、当時自らが残したデータを全て処分した。

私自身も、誰の目にも止まらないように。…私の手を離れてもそれが続けられるのであれば、それはそれで仕方ないことだ」

「クレアは、アンタを探してる。ってことはさ、上手くいつてないってことなんじゃ？」

「彼女がそうであるように、私にも、どうしても全てを捨てることが出来なかった。それが、これだ」

両手を広げ、水谷は自嘲したように笑った。

「矛盾しているかもしれないが、研究自体は私の生きがいでもある。私はせめて見つかることがないようにやり過ぐすでしょう。

…君も、もし今後、彼女に会うようなことがあつたら気を付けることだ。何をされるかわからない。君の友達にも、そう言っておいて」

「…アンタは、どうして俺にこの話を？」

「さあ、家まで送ろうか。今あそこに戻すわけにはいかないだろう。そうだな、

私は彼女たちとは一切関わらないし、君たちを危険にさらすつもりもないということだ」

「…なんか…肝心なことが聞けてない気もするんだけど」

「ところで、クレアちゃんはどうだった？なかなか美人だったろう？…こんなことばかりしていないで、もっと楽しいこともあるだろうに」

「はあ…、あ、あのさあ、親父は。あんたの言ってる秘密のなんかとかには何も関係ないんだよな？」

その言葉に、水谷は急に真面目な表情を浮かべた。

「全くない、とは言い切れない。あの会社でそれなりのポストに就いている以上、私には何とも言えない。ただ、雨宮君は、あまり父親のことを嫌わないでやってくれないか？」

「…よく分かんねえよ、やっぱり」

隣ではさくらがその辺にある資料らしき紙を飛行機にして遊んでいる。そのうちのひとつをぎゅう、と
漣のポケットに突っ込んだ。

「漣くん、お仕事まだなの？」

「うーん、連絡もないしなあ。早く帰ってこれるって言うてたのに」

日もすっかり落ち、そろそろ帰る約束の時間だと聖がべそをかいた。

「ごめんね、また遊びにおいで。バス停まで送るよ」

その時。家の前に、車の止まる音がした。玄関のチャイムが鳴る。

「はい、どちら様？」

「自分は、木島というモンです。そちらにウチの坊ちゃんがお邪魔してるって」

奈緒は聖に、知ってる人なの？と聞いた。聖はうん、と頷く。

「良かった、お兄さんが心配だからってんで、迎えに来たんですよ。それじゃあ、行きましようか」

「聖くん、またね」

「うん、奈緒ちゃん、ばいばい」

「湊くんにはちゃんと گفتくよ」

聖の手を引いて、木島は奈緒に一礼した。車が去っていくのを見送る。

奈緒はふう、と息を吐いた。

「湊くん、遅いなあ。なにやってるんだろ？」

誘拐

漣が帰宅したのはそれから直ぐのことで、奈緒はそのまま玄関先で彼を出迎えた。

「ただいま」

「おかえり漣くん、どうしたの？随分遅かったじゃないか」

「ああ、うん、…なんか妙なおっさんに絡まれてた…」

「何だソレ」

「聖は」

「ついさっきお迎えが来てさ、帰っちゃったよ。残念だけどまた今度ねって」

漣は昼間あった出来事を思い出していた。クレアとかいう、謎の女性。秘密があるのだという研究施設、

彼女の発言、水谷のこと。そして聖とそっくりな少年さくら。さくらが悪戯に突っ込んできた紙くずを広げてみて、漣はあ、と声を上げた。四つ折りにまたポケットの中に仕舞い込む。

水谷にはぐらかされた答えを結びつけるのを拒んでいたのは、本当は漣本人だったのかもしれない。

そんなことは非現実的で、ありえないと。

「奈緒さん、」

「ん？」

「あのさ…変な話なんだけど」

言い淀んだ澪の話を遮るように奈緒の携帯が鳴り出した。

「誰だろ…、あれ、お兄さんだ」

『あの、ごめんなさい。…お姉さん、だよな？…私、真山です』

浩輔の携帯から掛けてきたのは桃だった。普段の彼女とは違う、暗い調子の声だ。

「桃ちゃん？どうしたのさ一体」

『…お姉さん、こーちゃんが朝からずっと居ないの。何回電話したって』

「お兄さん？…は知らないなあ、聖くんは家に遊びに来てただけど」

『あのね、こーちゃんが朝からずっと居ないの。何回電話したって繋がらないし、

今日はヒマだからって言うてたのよ。私、こーちゃんところにも行つたの。

そしたら、誰もどこに行つたかなんか全然知らないって言うのよ。財布とか、携帯もみんな置いてったままっておかしくない？私どうしていいかわかんなくなつて、

そしたら聖くんはお姉さんのとこだつて聞いて、それで…番号わか

んなかったからこーちゃんの携帯借りたの、ごめんなさい』

「聖くんは朝、一人で来たんだよ。お兄さん、ってそっぴや心配してるからってさっき迎えの人が来たんだ、でもその人頼まれて代理で、って、木島って人が」

『木島？』

桃が訝しむような声で聞き返した。

「どうしたの？」

『お姉さん、何かやっぱおかしいよ。その木島って人、こーちゃんの昔の知り合いだけど』

聖くんのこと迎えに行つてなんて頼む訳ないよ。だってうちのお父さんに聖くんのこと売り込んできたのその人だしそれからずっとケンカしたままだっていつてたもん』

「え…」

奈緒はさあつと血の気が引いていくのを感じた。

「大丈夫、奈緒さん？ いったいどうかしたの？」

真っ青になった奈緒に澪は声を掛けた。

木島の運転する車の助手席で、聖は流れていく外の景色を眺めていた。

景色を見るというよりは、運転手から顔を背ける恰好で、ちらっと聖の様子を伺った木島は苦笑いを浮かべた。

「お前ってさ、昔っから俺にだけは懐かねえのな」

聖は無反応で、聞いてもいないようだ。

「可愛くねえガキだ」

道中のファーストフードで、木島が聖にジュースのカップを差し出した。

無性に喉が渴いていた聖はおずおずとそれを受け取ると、一気に半分くらい飲んだ。

木島がホルダーにカップを立てると再び、車を発進させる。

「お兄ちゃんは？」

「ああ、」

それには答えずにしばらく無言のままの時間が過ぎる。

聖は、車が見たことのない場所を走っているのに気が付いた。

何時まで経っても見慣れたところを通らないのだ。

「ねえ、お家に帰ってるんだよね？」

「うん、君の本当のお家にね」

「……？」

聖はぎゅう、と腕の中のぬいぐるみを抱きしめた。

「ねえ、それよりお兄ちゃんは？」

木島はやれやれ、と言ったような声を出した。

「あんま騒がれると厄介だから、お前の代わりに楽しいところに行ってもらってんだよ。」

あんなときは大変だったよなあ、俺もお前も」

「え……」

木島は口元に嫌味な類の笑顔を浮かべた。

「お兄さん、まだ生きてるといいね」

「なに、なんのこと？お兄ちゃんどこ行っちゃったの？ねえ！」

「……やかましいわ、」

急に騒ぎ出した聖に、後部座席ですつと眠っていた男がぼそつと呟

いた。

他に人が居ることに気付いていなかった聖は驚いて振り返った。暗くて顔はよくわからない。

「お兄ちゃん、誰…あ、」

急に聖がぐくん、と頭をシートに打ち付けるように倒れこんで、そのまま意識を失った。

木島がそれを見て感心したような声を上げる。

「すっげえ、」

「当たり前や、ウチのねえさんの特製の薬やからなあ、効果覲面やで。」

まあ非法やしもつかい起きるかどうかはわからんけどなあ。どや、死にたなったら、いつでも売るで」

「はは…遠慮しますって。ん？」

聖のポケットから携帯の着信音が響いた。

「ガキの携帯か、誰だ？ 一体」

「俺が出るわ、貸してみ」

奈緒ちゃん、と表示された画面を見て、その男が笑った。

『聖くん、よかった、今どこに居るの』

「悪いんやけど、俺その聖くんやないねん」

携帯から聞こえる見知らぬ声に、奈緒は息を飲んだ。

『あんた誰なの？どうしてこの携帯に出るの？』

「この子が寝てもうてな、代わりに俺が出たつとるんや」

『あんたたち、聖くんを誘拐して、一体どういつつもりなの』

「誘拐やないで、この子をほんまの家っちゅう所に戻すだけや。人聞きの悪いこといいなや」

『何のことだかわかんないわよ、一体なにが目的なのよ、聖くんは無事なの？』

「ほらまあ、無事は無事やで。死んどったらうちのねえさんにどやされるわ。」

この街で見かけたからゆうて、捜せいうもんやから、苦労したんやで。何の手掛かりもないっちゅうのに。

でもまあ俺の手に掛ればこんなもんや。協力してくれるっちゅう奴にも会えたしなあ。

「どうや、出来すぎた話やろ？」

からかうような口調で男が言った。

「話はそんだけや、ほな、ねえさんさいなら」

一方的に切れた電話はそれから繋がらなくなった。

「どうしよう…」

奈緒はその場に座り込む。

「あの子、どっかに連れてかれちゃったよ」

「奈緒さん、」

何かの手掛かりになるのならと、漣は昼間あったことを話した。それから、自分自身の憶測も含めて。

「聖は、なんか妙な奴らに狙われてるって」

「漣くん、その話信じてるの？」

「…俺にもよくわかんないんだけど」

奈緒は腰を抜かして座り込んだままになっていた。

「僕のせいで、あの子が…」

「奈緒さん」

漣は奈緒の肩を掴んだ。

「…しっかりしろよ、奈緒さん！落ち込んでたってなんもならねえだろ！」

聖を助けたいのは俺もだよ。自分を責めるよりやれることを考えんのが先だろ！」

「漣くん、」

奈緒は驚いた風な顔を上げた。泣きそうになった目元を擦ると、手の平をぐつと力を込めて握りしめた。

「そうだよね…くやしいなあ。僕はまだ情けない奈緒のままなんだ」とりあえず、中に入ろう。そういつて漣は奈緒に手を差し出した。土を払うと、奈緒ははにかんだように笑った。

「さっきは、ゴメン。言い過ぎた」

「謝らないといけないのは僕の方だよ」

「いや、デカイ口叩いたくせに、俺にもどうしたらいいかなんて」

その時不意に、漣は水谷のことを思い出した。

さくらの紙飛行機の中に、水谷の連絡先の番号が書きこまれているのを見つけたのだ。

答

漣は携帯を取り出すと、間違わないように慎重に、一つ一つボタンを押した。

2〜3回のコール音の後に、水谷からの応答があった。

『一体どうしたんだ？ウチは出前はやっていないぞ』

「そーじゃなくって！あ、あの、すまねえ、俺は雨宮だけど…この番号」

『わかってるよ。…よっぽど君のことを気に入ったんだな、さくら君は』

漣はくしゃくしゃになった紙切れをぎゅう、と握りしめた。

「…聖が、俺の友達がアイツらに連れてかれちまったんだ！

アンタが知ってること、なんでもいいから教えてほしい。頼むから、アンタの力を貸してほしいんだ！」

少しだけ沈黙があった。

『…わかった。直ぐにでもそちらまで向かうよ。…実を言えば私はこの件に関して責任の一端がある』

「ありがとう、」

『そうそう、雨宮君。私がそこに行くまでには少々時間が掛かる。君にはその間に私が当時使っていたノートを君のお父さんから受け取ってきておいてほしいんだ。中には必要なコード番号やらが書き込んであるのですね』

「え、…なんで？親父がアンタのノートを？」

『私がそこを辞める時に彼に預けたんだよ、秘密を拡散させておくためにね。私と君のお父さんは同期なんだ』

「…わかった」

釈然としないまま通話は切れた。

「どうだったの？」

「奈緒さん、」

奈緒が心配そうに漣を見つめている。電話の内容を、水谷が協力してくれること、そして彼から頼まれたことを伝えた。

「…なんかよくわかんねえんだけど」

「うーん、行くしか、ないよねえ？ああ、僕の自転車貸してあげる」

昼間の暑さが和らいで、夜になると少し冷え込んだ。吹き抜ける風

が冷たく感じられる。

「…あー、免許でも取るか…取ればなあ」

自転車を漕ぎながら意識は次第に冷静になっていく。
そういえば、父親に会うのは一年ぶりになるのだ。

—— 零の母親が亡くなったのはまだ彼が幼い頃のこと、写真嫌い
だったこともあり

彼女の顔を零はほとんど覚えていない。

自分の瞳の色が他の子どもたちと違うのだということを知ったのは、
小学校に上がってすぐの頃だった。

隣の席の女の子が何とは無しに言った。

『ねえ、どうしてれいくんの目は青いの？』

その日の帰り、迎えに来てくれた父に聞いた。

『…どうして、ぼくは他の子と違うのかなあ？』

『そんなこと、零は気にしなくてもいいんだよ』

繋いだ手をぎゅ、と握りしめながら、父はそう答えた。

父が仕事人間だったからなのか、母がいた頃からそうなのか。

親戚同士の付き合いなんかはほとんど無かった。

両親共に紛れもない日本人のはずなのに、と。漣は自分の目の色が気になって仕方がなくなっていた。
何度となく父親に尋ねた。

『漣の目は生まれつきのものなのだから、それを恥じることはない』

彼はそう、答えるのだった。

わかつてはいても上手くいかないものだ。漣は次第に学校へ行くのを拒むようになり、

高校はどうか卒業したものの進学も就職の道も無かった。

それなりの会社に勤める父親、なのに自分は出来損ないの息子だ。

そんな考えが日に日に漣を追い詰めるようになった。

18を機に、家を出ることに決めたのも、そんな父親に負い目を感じたからだった。

それすらもまた父の負担になるだけだと、わかっていた。

だが父は、一度もそんなことで漣を責めたりはしなかった。

『俺だってもう大人なんだ、好きにやらせてくれよ』

そう言った漣に、

『いつでも、顔を見せに帰っておいで』

そう言って笑った。

「…そうだよ。俺には夢なんかなかったし、やりたいことがあるわけでもない。」

仕事だって見つからないしバイトだって中途半端だ。…それなのに聖のこともほったらかして、遊んでやろうともしなかったんだ…」

気が付くと、家の前に立っていた。携帯で父に連絡を取る。

先に水谷が父に電話しておいてくれるので、到着を告げるだけの短い通話だ。

ドアノブに手を掛けた。

キイ、と軋んだ音をたててドアは開いた。中からは、なんだか懐かしい匂いがする。

「おかえり」

出迎えた父が言った。それからゆっくりと微笑んだ。

「…ただいま」

しばらくして、水谷の車が到着した。出迎えた奈緒の前に現れた水谷は、奇妙なお面を被っていた。

「あの一、あなたが水谷さん？」

「ああ。多少変装しておかないと色々とまずいのでね」

「…余計目立つんじゃない？検問とか引っ掛かるわよソレじゃ」

「うむ、…それもそうだな」

お面を外した水谷だったが、その下はまるでミイラ男のように包帯でぐるぐる巻きに顔を覆い隠していた。

頭を抱える奈緒だったが、気を取り直して、漣が帰るまで待つように部屋の中へと二人を案内した。

「君がさくら君？ほんとそっくりだなあ」

「彼らは双子として産まれたからね。いや、さくら君だけじゃない。あそこの子どもは、みんな同じ顔で産まれてくるんだよ」

奈緒は目の前の現実になんか寒気を感じた。

「詳しい話を聞かせて、」

「もう、君たちもわかってることだと思う。さくら君と聖くんは、私たちの研究で生み出されたある人物のクローン人間なんだ」

はっとして、奈緒は隣にいるさくらを見た。この子が聞いててもいいことなの？というような表情を向けると、水谷は頷いた。

「ああ、さくら君は、もうそのことを知っている。だからこそ、取り壊される前に見ておきたいと言いつ出したんだ。」

自分が産まれた場所をね」

ずるずると、さくらは無表情に出された飲み物を啜っていた。

「…ある人物っていうのは、一体誰なの？」

水谷はカバンの中から一枚の写真を取り出して見せた。

そこには、聖によく似ているけれども、もう少し年上であろう少年が写っていた。高校生くらいだろうか。

「この子は、会長の息子さんだ。もう何年も前に事故で亡くなった。私たちは極秘にクローンの開発を手掛けていた。会長は、自分の亡き息子のクローンを作成させるのと引き換えに莫大な資金と施設の提供を約束してくれていたんだ。クレアともその頃に知り合った。

彼女は自ら志願して、海外から派遣された研究員だった。皮肉なことに参加してまもなく彼女もまた、自らの息子を事故で失った。そのことが返って彼女を研究へと駆り立てることになった」

奈緒はああ、と声にならない声を上げた。

「…それで、子どもを作ってどうなるの。僕は科学とか、そういうの疎いし。そういう気持ち、よくわからない」

「単純に、もう一度会いたいんだと、彼らは言った」

「会いたって、それは、…わかるよ」

「そうなのか？」

水谷は不思議そうに首をひねった。

「いや、実のところ私には、して良いことと悪いことの区別がよくわからないんだ

…その当時、私は個人的に極秘でもう一体、別のクローンの作成に取り組んでいた。

先にそちらの方が上手くいった。初めて成功した。私は嬉しくてたまらなかった。

私が作るうとしていたのはクレアの亡くした息子のクローンだった。私は彼女に新しい息子をプレゼントしようとした」

「…酷い話だ」

「その当時、事情を知った雨宮に私は羽交い絞めにされた。絶対にやめるときつく言われた。

私には何がいけないのかわからなかった。雨宮は、このことは誰にも言わないし秘密裡に処理すると私に言った」

「雨宮…って、まさか」

水谷は頷いた。

「誠一に託した子どもは立派に育ったんだな。私が育てた所為なのか、

さくら君はこの通り非常に可愛げがない」

「それじゃあ、澪くんは、」

「クレアの息子、だよ。厳密に言えば違うが」

奈緒は言葉を失った。

涙が出ないほど、どうしようもなく悲しかった。

「ひどい」

「すまないことをしたと、今は思っている」

奈緒が平静を取り戻すまで、水谷は黙って奈緒の様子を伺っていた。さくらが空になったグラスの氷をストローでかき回す音だけが響いていた。

「… 澪くんのお父さんは、そのことをずっと黙ってるのね」

「私は、真実はいずれ話すべきことだと思っている」

「なんて言うのよ、本当の澪くんはもう20年も前に死んでるんだとでも言うの？」

奈緒はテーブルをがん、と叩きつけた。水谷は落ち着くように、と奈緒をなだめる。

「ただ、それを言うべきなのは私達ではないんだよ。… 誠一に預けたものはただの日記帳みたいなものさ。

もう10年も前の情報が今も通用すると思うかい？ 私はこういう事態になった今、

雨宮が息子になんて言うかが知りたかったんだ」

「…水谷から連絡があったよ。これが必要なんだろう?」

父が差し出したのは黒皮の分厚い手帳だった。その上にカードキーらしきものが添えられている。

「これは?」

「私のIDカードだよ。それを使えば、どこへでも入れる」

ああ、後でちゃんと返してくれよ、そう言って彼は笑った。

「何も聞かないんだな」

「私の方で、やれることはやっておこう。あまり騒ぎにならないように。」

…私はなにも聞くことはないよ。それより、元気そうでよかった。気を付けて、行っておいで」

「…ありがとう」

漣は父に頭を下げると、外へと大急ぎで走り出した。その後ろ姿を父は、黙って見送っていた。

「漣くん」

「遅くなつてごめん！ほら、手帳、預かつてきた！」

息を切らして漣が帰ってきた。その様子を見て、水谷は奈緒にそつと呟いた。

「誠一はなにも言わなかったんだな。それが彼の答か」

「もう時間がない、急ごう、奈緒さん！」

車に乗り込む際、助手席に座った漣に水谷は言った。

「…さくら君があそこに行きたいと言い出した時、偶然君がアルバイトとして私を見つけた。

これは一つの運命なんだろうな。いや、必然的な偶然というべきか。まあいい、

それじゃあ、行こうか」

暗闇の中の一つの灯り

すっかり夜も更けて、疎らな街灯の町中を走る。

暗い車内で時間とともに高ぶっていた気持ちが収まってきた。

「ねえ、僕たちだけで本当にどうにかなるのかな？」

不安そうに奈緒が言った。

「それは心配ない。事が公になれば困るのはお互い様だからね。向こうだって

警察沙汰にはしたくないだろうから手荒な真似はしないさ…多分」

「…何その最後の弱気な発言」

漣に突っ込まれて水谷は大げさに咳払いをした。

「なに、居場所はわかっているのだから我々は見つからないように聖くんをそつと連れ出しさえ出来ればいいんだ。

この町にはもう居られなくなるだろうが、しばらく身を隠して暮らせばいずれ諦めてくれるだろ」

「そう、上手くいくかな…？」

車内がしんと静まり返る。

信号待ちの間に、水谷は手帳に挟んでいた写真を抜くと漣に手渡した。

「…聖？」

「北村裕司くん、だよ」

そこには亡き会長の息子が、こちらに向けてはにかんだ笑みを浮かべていた。

どこか校門前で写されたものだ。入学の記念写真といったところか。

「この子をそっくり同じに作り出そうというのが私たちの計画だった。世間一般の認識がどうであろうと、

十分な施設も資金も用意されているのだから、クローン開発に興味のあった私には何の疑問もなかった。

それから数年かけて、何人かの裕司くんと同じ遺伝情報を持つ子どもが作成された。

…ただ、その子供たちは非常に短命でね、多くが3ヶ月と持たずに死んでしまうんだ。1年位生きられればいいほうかな？

そんな中、珍しく双子として産まれてきた、この子たちは1年を過ぎててもまだ元気に生きていた。私はふと思ったんだ。

…このままこの子たちが成長したとして、一体どうなるんだろう、とね。

大きくなって、裕司くんの代わりとして会長に会わせたところで、それから？

私はさくら君たちの眠っている部屋の中で考えていた。このまま、外の世界を知らずに生きるのかと」

水谷はそこで一旦言葉を区切り、隣にいる澪を見た。

「…私はその時また別のことを考えた。それから後は知つての通り。自分のしていることに罪の意識を感じ始めた私は

重要なデータの全てを破壊しこの子たち双子を連れて逃げ出した。名前すら与えられないままのこの子たちが不憫になったんだ」

漣は手にした写真を見つめた。この子と全く同じになるよう作られたさくらや聖は、クレア達にとっていったいなんなんだろうかと、とクレアは言っていた。

「…その子は人間じゃあないって、…クレアは自分が作り出したクローンのことは、人間じゃないって言ったんだ」

奈緒は後部座席でうーん、と唸るような声を出した。

「でも、子どもたちは普通の子とかわりないんでしょ？」

「そうなんだ。子どもの世話は、残念ながら我々には必要な知識も技術もない。それで、私たち以外に、ベビーシッターとして雇われていた男が居てね。もちろん、彼の存在も他の者は誰も知らない。彼はその時黙って見逃してくれたよ。心の底ではそうなることを望んでいたんだろう。」

「…本当は皆どうにかしてやりたいとは思ってたが、とてもそんなわけにはいかなかった。まだ数人のクローンの子どもがいたんだが彼らもそうぞんざいに扱ったりはしないだろうからね。」

「クレアもどうせ連れ出したところで生きてはいまいと高を括っていたんだろうから、今まで放っておいたんだろうな」

「それがあの時大きくなった聖を見つけて、…どうしても連れ戻したくなっただんだ」

「その彼が、今回のことで咎められたりしていなければいいのだが」

「俺、その人のこと覚えてない…」

さくらがぼそ、と呟いた。

「色々見て回ったけど、見つからなかったんだ。会ったら、ちゃんとお礼が言いたかった」

奈緒は頂垂れたさくらをそつと撫でてやった。

「ところで、10年前の話だ。私たちは行くあてもなく町を彷徨いながら逃亡生活を送っていた。

双子を連れて、慣れない育児をしながらというのは非常に大変なことであった。目立つわけにもいかないしね。

ある時、買物に立ち寄った町で私はすっかりしていて、双子の一人とはぐれてしまったんだ。

気付いた時には傍にはさくら君しか居なかった。慌てて人ごみの中、さくら君を抱えてその子を探し回ったよ。

そうこうしているうちに辺りはすっかり暗くなり、道行く人も疎らになった。

…後で知ったんだが、そこはならず者のたまり場のような所でね、子連れが遅くまでいていいような場所じゃなかったんだ。

おまけにすぐ近くで小競り合いまで始まった。銃声が響く中、これ以上は私やさくら君にまで危険が及ぶと判断した

…私はその子を捨てて町を後にした。

私は改めて後悔した。この子たちに自由を与えるつもりが、かえって不幸な目に合わせてしまったんだと自分を責めた。

…そう、私は正直君らの友達があの子どもだなんて未だに信じられない、しかしそれ以外に考えられないのもまた事実だ」

「お兄さんの話だと、10年位前に親とはぐれた子どもを拾ったんだって。それに、その裕司くんにも、さくら君ともそっくりなんだ。その子に間違いないよ」

「よかった、」

水谷はほっとした声を出した。

「私は、これでようやくあの子に償うことが出来るのかもしれない。君たちに礼を言うよ」

奈緒がくす、と笑った。

「聖くんって、運がいいんだか悪いんだかわかんない子だね」

「いや、運がいいんだよ、アイツはきっと」

車を道脇に停め、自販機で飲み物を買った。奈緒が急遽弁当として作成したお握りを取り出す。

「ごめんね、もっとちゃんとしたもの用意したかったんだけど」

あり合わせなの、そう言っていたが。胡麻と刻んだ梅と海苔のいい匂いがして、澪は忘れていた空腹を思い出した。

「とんでもない。ありがたくいただきます」

「…おいしい、」

さくらがそう呟いた。澪はあのラーメンの味を思い出した。

「遠慮しないで、いっぱい食べろよ」

遷がそういつと、さくらはうん、と言って頷いた。

「ここでいいですか？」

木島の運転する車は施設脇の空き地に停車した。

「ああ。ご苦労さん」

男は車を降りると、大きく伸びをした。

「エコノミーなんちゃら症候群になりそうや」

木島ははは、と笑うと啜えた煙草に火を点けた。

聖はぐったりしたまま、まだ眠っている。

「ガキはまだ起きねーですけど、どーします？」

「しゃーないわ、俺が担いでくわ」

助手席のドアを開け、シートベルトを外す。男の腕の中に倒れ掛か

った聖を抱き抱えると

またドアを閉めた。耳元ですうすう、と寝息が僅かに聞こえる。
ふいに男が木島を振り返った。

「なあ、ところでそのビデオって、儲かるん？」

「ああ、まあ表だって流通するよーなモンじゃねえっすよ。マニア
向けの層の開拓してるっつーか
まあほんとは綺麗な姉ちゃんの良かったんすけどね」

「ああ、自分ええ趣味しとるで」

「スナッフビデオ、興味あります？」

「うなされそうや」

男は顔の前で手を振った。

「じゃあ工藤さん、俺はこれで」

「世話なっ たな、」

工藤、と呼ばれたその男は木島に手を差し出した。木島がへへ、と
笑いながら握り返す。

一瞬、何かが刺したような感触があった。

「な、…何」

「お前のことも処分しとかんとあかんのや、悪う思わんといて」

「そんな……っぐ、ああ、っはあ、」

木島はどき、とその場に倒れた。痙攣したように手足がびくびくと引き攣っている。

口から泡のようなものを吐き出しながらやがて動かなくなった。

「ねえさんもえげつないもん作りよるわ」

工藤は足で木島の死亡を確認し、顔を覗き込むようにして見た。

「俺な、仲間を裏切るようなヤツ嫌いやねん」

そうしてにや、と笑うと聖を抱えなおした。ポケットの中の携帯を探り出す。

「ねえさん、俺や。お待ちかねのもん連れてきたで」

ママ

唸り声のような音をたて続ける機械に囲まれた部屋の中で、クレア
は一人の子どもを抱いていた。

何かに気を取られているようで、その顔に表情はなかったが、あや
すように腕の中で揺らしていた。

落とした照明の薄明かりの中、眠っていた子どもが目を覚ます。

クレアはにつこりと笑いかけたが、そのうちにぐずりはじめた。ま
だ言葉にはならないああ、とかうー、と言った声を上げて
手足をばたつかせている。

「ほら、いい子いい子」

ふふ、とクレアは笑いながら子どもをあやしている。お気に入りら
しい玩具で気を引くと、子どもの目がぱちりと見開いてクレアを
見た。

その黄色に近く見える両目が見つめている。

あの写真の子どもとよく似ている。

もう、何年もの間見続けてきた顔だった。

子どもはしばらくするとまた、うとうとし始めた。

クレアは傍にいてどこか愚鈍そうな男に子どもを引き渡す。男は腕
の中に大事そうに抱えるところかへと消えた。

その男と入れ替わりに、工藤がやってきた。
抱えていた聖を近くの作業台の上に寝かせる。

「なあ、ちょっと子どもにはキツすぎるんちゃうで、これ」

聖は未だに眠ったままで、工藤は空になった容器を掲げた。

「いいのよ、別に起きなくても。この子のことを調べただけなんだから」

「おっそろしい女やで、ほんま」

微笑むクレアとは対照的に、工藤は苦笑いを浮かべた。

「コイツの面倒見とったんな、やっぱ水谷とは関係ない奴っちゅう話や。協力してもうた奴がな、

なんか連れが何年か前に拾ったガキを育てとるんや言うとなわ。

まあ、どっちにしろもう死んだからわからんのやけど」

クレアは冷たい台に寝かされた聖の寝顔を見つめてみた。

「間違いないわ、私が見間違うはずないもの。…少し弱ってるみたい。他の子どもとどこが違うのかしら？

そう、この子はたしか双子で産まれてきたのよね」

「まさか、また人探しかいな？」

工藤はやれやれ、と言った風なオーバーなリアクションつきでため息を吐いた。

「そう、分かっているなら頼めるかしら？」

「ねえさんの頼みなら逆らえんなあ。ああ、俺それより先に片づけ

しとかなあかんのや。あんなもん見つかったらうつとうしいやろ」

工藤はそれじゃあ、といった仕草で右手を上げ、部屋を後にした。

水谷の車が施設脇の空き地に停車する。漣は昼間訪れた時とまた違う印象を受けるその建物を見上げた。

「私と雨宮くんの二人で中に入ろう。さくら君は、ここで待っていてくれ」

「なんでだよ、俺も行きたい」

さくらが不満そうに頬を膨らせる。

「君を危険な目に合わせるわけにはいかないんだよ。クレアは君のことも捕まえようと考えるだろう。」

奈緒さんは、さくら君と居てやつてもらえるかな?。」

奈緒はさくらをぎゅう、と抱きしめた。

「うん、二人とも気を付けて」

「じゃあ、行こうか」

さくらは水谷と漣に手を振った。

二人は人目を避けるように動き、裏口から中に入る。

非常灯だけが照らす中、懐中電灯片手に進む。気を付けていても静まり返った中で足音が響いた。

しばらくして、ひとつの部屋の扉の前で水谷は立ち止まった。

父のカードをカードリーダーに通すとロックが解除される小さな音が聞こえた。

「誠一には、迷惑をかけることになるな」

水谷は漣にカードキーを返すと、ドアを開いた。その部屋は、というかほとんどの場所は荷物を運び出した後だったのでがらんとしていた。部屋の奥に扉を見つけた。どこか別の部屋へと続いているものようだ。

漣が手を掛けるのとほとんど同時に内側から扉が開いた。

そこには大男が、ぼんやりとした目でこちらを見つめている。

「うわっ、」

男は漣に、口元に指を当てて見せた。静かに、ということらしい。

「やあ、久し振り」

水谷に気付いた男がそつと頭を下げた。

促されて中に入る。色味の違う穏やかな灯りに照らされた中には数人の子どもが眠っていた。

小さなベビーベッドがずらり、と並んでいる。中で眠るのは年頃は

違えど皆同じ顔をした子どもたちだった。
澪はその異様な光景に寒気を感じた。

「俺、子どもなんて見分けつかないって思ってたんだけど…」

そのうちの一人がぐずりはじめる。男がその子を抱え上げ、オムツの様子を見、あやすように動かし始めた。
澪はこの人がその、ベビーシッターであると気が付いた。

「水谷さん、この人」

「ううむ、どうも少しばかり心を閉ざしてしまっているな。元々そういうところはあったのだが」

子どもを見つめる男の目は優しい。

クローンの子どもは産まれてもすぐ死んでしまう、と、彼らは言っていた。それなら、

この男はこれまでずっと、生み出されては死んでいく子どもを見続けてきたのだ。

それがどれだけ悲しいことが、澪には想像もつかなかった。

「ところで、ここに中学生くらいの子どもは来なかったかい？」

男は顔を上げ、首を振った。

「そうか、いや、もしかして」

水谷は携帯を取り出そうとして、うつかり置いてきてしまったことに気付いた。

「新しい施設には、ここを引き継いだものがあるのかどうかを誠一に尋ねてみよう。君はここで待っていてくれ」

「ああ、」

漣は男があやすのとはまた別の子どもの寝顔を見つめていた。

「うっ、」

不意に子どもが目を開く。あの、黄色い瞳が漣をみた。

『綺麗な目、』

初めて出会った時のことを思い出した。

さらさらした髪を梳いてやるときやつきゃつ、と嬉しそうに笑う。男は漣が泣いているのを不思議そうに見つめていた。

「——おじさん達大丈夫かな」

さくらが心配そうに呟いた。傍に生えている雑草を手持無沙汰に引

きちぎりながら。

「上手くいけば、いいね。さくら君、兄弟に会えるんだよ」

「なんか実感、湧かないんだけど」

すうつと生暖かい風が吹き抜けた。奈緒は空を見上げる。

夏の夜空に無数の星が、欠けた月と共に輝いていた。

「姉ちゃん、俺、」

「ん？」

さくらが言いにくそうに口ごもった。

「俺ってさあ、俺たちって、誰なのかなあ？ 聖、なんも知らないんだよね？」

「……」

近くでがさ、と誰かが近づく気配がした。

「あ、」

「…誰かそこにおるんか？」

その話し声に奈緒は聞き覚えがあった。

「（…さくら君、逃げな、）」

「（え、ねえちゃん）」

さくらは戸惑いながらもその場から離れる。
ざ、と奈緒の目の前に工藤が現れた。

「なんや、お前？」

「さあ、あたしはただ、たまたま通りがかったっただけよ？」

奈緒は立ち上がることが出来なかった。しかし何事もない風を装って答えた。

工藤はふうん？と、奈緒を見下ろす。

「…お前、もしかしてあの電話の女か？」

「…っ！」

びく、と体を強張らせた奈緒に確信を持つと工藤が笑う。

「なんや、ホンマにそうやったんか。…一体どないしてここがわかったんや？」

お前らもけっこうやりよるやないか」

「…バレてるならもういいわよ。聖くんをここに連れてきたんだろ？あの子を返して！」

「それがなあ、もう一人も連れてこい言われとんのや。お前、水谷つちゅうヤツと絶対関係あるんやろ。」

「…お前、何を知ってんねん？」

奈緒は辺りを探り、何か棒状のものを掴んだ。何かはわからなかったが目の前で振りかざす。

「怖い怖い、」

「近寄らないで！」

「ああ、」

工藤はくる、と方向を変えて歩き出した。

「俺せないかんことがあったんや」

奈緒はどうにか壁に体を支えて立ち上がる。
逃げようにも足が言うことを聞いてくれない。

「ちくしょう、」

「…くっそ、重たいわあコイツ」

工藤は引きずってきた木島の死体をどさ、と近くに放り出した。

「…っ！」

奈緒が咄嗟に口元を覆い、その隙に後ろに回り込んだ工藤が身柄を拘束した。

「…！」

「ああなりたないやろ？大人しくしいや」

奈緒は諦めたように体から力を抜いた。

「…来たわね、」

聖を抱き抱えたクレアが出迎える。

奈緒は両手を後ろで縛られていた。工藤の手が離れ、奈緒はその場に倒れこんだ。

「コイツ、なんか知ってんねん。聞きたいこともあるやろ思つてな」

聖は少し弱った様子に見えた。

「聖くん！」

「大丈夫よ？眠らせてるだけだもの」

「アンタ、どうしてこんなことが出来んのよ！」

「さあ？」

クレアはそう言って笑った。

「ほら、もういい加減起きなさい」

ぺちぺちと頬を叩く。聖は少し顔を顰めたように見えたが、起きる

様子ではない。

クレアはアンプルを取り出すと薬液を注射器に吸い込ませ、聖の袖をまくりあげた。

「ちょっと、なにやって」

「起きなさい、って言ってるのよ。私の言つことがきけないの？」

「ねえさん、無茶やで、」

クレアは聖に新たに薬を打ち込んだ。

「う…」

「ほら、効いてきたでしょう、目を覚ましてちょうだい」

「そんなのって…」

奈緒にはその光景が、昔の自分の妻と娘の姿とはあまりにもかけ離れて映った。

「そんなのって、ないよ。子どもを起こすお母さんってそんなんじゃない」

その時不意に、奈緒は何かに気付いた。

聖がぼうつとした目を開く。すぐ傍にいるクレアを見つめた。

「…れい、くん…?」

クレアが笑う。嫌な類の笑い方だった。

「ああ、そうだ…。聖くんはなんで、澪くんのこと、
…澪くんの目がアンタの目に似てたから…
この子、どこかで覚えてたんだよ、アンタのこと」

「…っう、っう、」

急にクレアの腕の中で聖が苦しみだした。

「拒絶反応や、キッツイ薬で寝とったんをむりやり起こしたからな」

「なんてこと…!」

クレアはもがく聖をぎゅっと押さえつけた。

ぱたぱた、と子どもの足音が聞こえたかと思えば、
澪たちのいる部屋にさくらが走りこんできた。

「って、お前!どうしたんだよ、待ってろって言ったる」

さくらはぜいぜいと息をきらして、
漣に叫んだ。

「ねえちゃんが、連れてかれた！」

約束

さくらは部屋の様子を一目見て、ああ、と声を上げた。その視線の先には子どもたちが眠っている。

さっきまでの興奮と相まって、普段無表情の彼が動揺しているのが見て取れた。

「さくら、」

さくらは無言のまま、漣の見ているベッドの中の子どもにそっと触れた。

その触れている赤ん坊も彼自身なのだ。とても信じることが出来ないが。

さくらは不思議なものを見ているような目を漣に向けて呟く。

「俺、大丈夫だから」

「…ああ」

「つーかおじさん、目赤いよ？なんだよ泣いてたのかよカツコ悪いなー」

「って、うつさいなもっ！…ってそんなことより！一体何があったんだよ」

さくらの表情がまた、不安そうなものに変化した。

「俺たちの近くになんか妙なおっさんが来たんだ。ねえちゃんがア

イツはヤバいって、俺を逃がしてくれた」

「ヤバいって、聖を連れてったヤツってことなのか？」

「…わかんない。けど、クレアのとこにいるんなら、場所は俺がわかる」

奥から、世話を終えた男が再び現れた。

「…あ、」

男の目が、驚いたように見開かれた。のっそりと、信じられないものを見ている風な目をして近づいてくる。

彼はさくらがあの子どもなのだと気が付いたようだ。そうして、少しだけ微妙な距離を取って立ち止まった。

「おっちゃん、」

さくらも、記憶の端からは消えてしまった恩人のことに気付いた。男がそうつとさくらに手を伸ばす。

「…ただいま」

伸ばされた手がさくらの頭を撫でた。

男は顔をくしゃくしゃにして、本当に嬉しそうに笑った。

「俺、行かなくちゃなんないんだ、ごめん」

「…元気で、」

漣とさくらは子どもたちの居る部屋を後にした。

一度だけ、さくらは振り返った。部屋の前の廊下で、男が二人を見送っていた。

「離してってば！」

奈緒は両腕を拘束されていたが、クレアに食って掛かろうとして工藤に後ろから抑え込まれていた。それに身を擦じらせて抵抗する。工藤は呆れたような声を上げた。

「…なんや、えらい馬鹿力やなお前」

「当たり前だろ、僕はこう見えても男なんだよ！」

「ああ？」

工藤が一瞬動揺したのを機に腕を振りほどいた奈緒は、クレアに詰め寄る。クレアは聖を抱いたままじりじりと後ずさった。

クレアの腕の中で、さっきまでもがいていた聖がぐったりしていた。

「お願いだから、この子を殺さないで…。この子はモルモットなんかじゃないの。」

心配して、帰りを待つてゐる家族がいるんだよ」

「…知らないわ」

奈緒の背後でちゃり、と金属音が聞こえた。

「ねえさんの邪魔すんなや」

工藤が内ポケットから取り出したナイフを奈緒に突きつける。
奈緒は反射的に目を瞑った。

「いや…」

何か鈍い音がして、
恐る恐る目を開いた奈緒が見たものは、床に倒れた工藤と、なにか金属の棒を握りしめた水谷の姿だった。
水谷は考え込むように首を傾げる。

「…今のは、してもいいことだったのかな…、正当防衛か？まあいい」

金属棒をがらん、とその辺に転がすと、水谷は縛られた奈緒の手を解いてやった。

「…助かったよ、ありがとう」

「…水谷」

すうつと、クレアの青い目が冷たい色に変わった。

「クレア。もう、これ以上無意味なことを続けるのは止めにしないか」

言いながら、水谷がクレアとの距離を詰めた。

「その子も、早く処置をしないと取り返しがつかないことになる。だから」

「イヤ、嫌よ！この子は渡さないわ！」

急に血相を変えてクレアが叫んだ。気圧された水谷の足が止まる。聖をぎゅう、と抱き抱えてクレアはさらに二人から離れた。

「嫌よ…私にはもうなんにも残ってないの」

クレアは目を閉じた聖の顔を撫でた。

一瞬、その表情がまるで母親のように穏やかに見えて、奈緒は声を詰まらせた。

「クレア、」

「水谷。貴方の力を、借りたかったんだけど…もう、どうでもいいわ」

クレアは新しく、アンプルを突き刺した注射器を聖に突きつけた。

「それ以上近寄ったらこの子の命の保証はしないわよ」

く、と二人とも息を飲んだ。

その時。

ばたばた、と奥から足音がして、さくらに先導された澪が現れた。

「なによ、まだ仲間がいたの？」

水谷はクレアを見た。そうして一歩踏み出すとじり、とまた彼女が後ずさる。

水谷は一度大きく息を吐いた。

「…君は町で聖くんを見掛けたときに、…いや、そもそもこれは私の勝手なエゴでしかないか。
雨宮くんのことにも気付いてほしかった」

「どついう意味なの…」

クレアは水谷が言うところの、駆けつけてきた青年を見た。

「おじさん！」

先に現場の状況を見たさくらが叫ぶ。

「聖！いったいどうしたんだよ、何があったんだ！」

クレアの右手から注射器がからん、と落ちた。

「まさか…」

クレアが何かに気を取られている、その隙に彼女に詰め寄ると、漣は聖を奪い返した。

「おい、お前！　いったい聖に何したんだよ！」

間近で漣はクレアを睨み付けた。クレアの目が、驚いて見開かれている。

彼女は無言で水谷を見た。

「…済まないことをしたと今は思っている」

頭を下げ、水谷は静かにそう言った。

急に、遠くでどん、と地鳴りするような音が響いた。
その場の全員が音のした方向を振り返った。

そこには、よろよろ起き上がった工藤が、血をだらだらと流しながら笑っていた。

「…あんなもんで思いつきり殴られたら死んでまっやる、何やねんお前ら、おかしいやろ」

「アンタ！」

工藤の手には何かのスイッチが握られている。

「…人捜しの次は人殺し、しまいにはビルの発破解体や。…何でも

屋か俺は。

なんぼもらえるんや」

再び爆発音が響いた。

「きゃあ！」

「ははは… かつこええな、ええ気味やで」

どさ、と工藤は再び倒れた。血溜まりが出来た中でそれつきり動かなくなった。

施設内を警報が鳴り響く。

「大変だ」

「ダディ、あそこ、火事だ！」

窓から見える棟から出火し始めている。

幸いこの場所はまだ爆破を免れているようだ。

「雨宮くん、君は早く聖くんを連れて逃げてくれ。

私は残されている子どもたちを助けに行く」

「わかった」

クレアは放心したように涙が聖を抱き抱えるのをぼうつと見つめていたが、

急に立ち上がると近くの部屋に駆け込んでばん、と乱暴にドアを閉めた。

「クレア、」

水谷は慌てて駆け寄りドアに手を掛けた。中からは鍵が掛けられている。

「なにをしてるんだ、ここは危ない！」

水谷の呼びかけに、クレアは応じようとはしなかった。

「…もう時間がない、すまない」

水谷は子どもたちのいる所へ向かった。

「奈緒さん、さくら、急ごう！」

澪は聖を背負うと出口に向かった。さくらが、クレアのいる部屋の前に駆け寄る。

「さくら君、」

さくらは扉をじっと見つめていた。ぐ、となにか思いつめたような顔をしている。

もう一度、どこかが爆発する音が聞こえた。

「…ママ！」

さくらが部屋の中にいるクレアに向かって叫んだ。
それは、爆音に紛れて聞こえたのかどうかはわからない。

ぼろぼろと泣き出したさくらを抱えると、奈緒は走った。

またどこかでどん、と音が聞こえる。

建物からだいぶ離れた場所で、漑は聖をそつと降ろした。

「すげえ…」

他人事のように、漑は思わずそう呟く。
しばらくして、聖が目覚めました。

「…れい…くん？」

「ああ、もう大丈夫だからな」

漑が顔を覗き込むと聖はにっこりと笑った。

「漑くん、おかえり」

「…ただいま。…散々な一日だったなあ。
ああ、俺が働こうなんてしたばかりに」

「ばか、」

「はは…」

駆け付けた消防車のサイレンの音が聞こえてきた。

「奈緒さん達、大丈夫かな」

「ごめんね、」

澪をじっと見つめていた聖が言う。

「なに、謝ってんだよ」

聖の震える指が澪の頬に触れた。つう、と生暖かいものが伝う。気づかないうちにそこはガラスか何かの破片に当たり、割とざっくりした傷口が出来ているようだった。

「お前、怪我してないか」

「うん、」

聖の腕がぼす、と夏草の上に落ちた。

「ごめんな、謝らなきゃいけないのは俺の方だよ。

バイト代は入んねえけど、またどっか遊びに行こうな」

「うん」

「どこでも、好きなとこ連れてってやるから」

「うん、」

「絶対、約束する」

「…ありがとう」

聖の指がぎゅう、と漣のシャツを掴んでいる。
夜はすこし冷え込んだ。

「ちよっと、風が出てきたな…寒くないか？」

その問いかけに、もう、返事は聞こえなかった。

「なあ、おい、…ウソだろ」

漣の手ががくがくと震えて、聖の髪をかきあげた。

「なんでだよ。なんで、こんな…聖、」

泥や埃で汚れた頬を拭ってやっても、反応はなかった。

「ああ…」

漣は聖に覆い被さるようにして泣いた。泣くというより、殆ど吐きたいくらいの気分だった。

感情が溢れ出して、追いつかなかったのだ。
その耳元に、サイレンの音が鳴り響いた。

搬送された先の病院で、聖は静かに、息を引き取った。

夢の終わりに

それがどこかわからない場所に、漣は立っていた。辺りは霧が立ち込めたようで何も見えない。

雲の上を歩いているような、不思議な気分だった。すう、と大きく息を吸い込む。

しばらくして、ぽん、ぽん、と、ボールをつくような音が聞こえてきた。

漣はその方向を見る。

ころころ、と足元に青いゴム製のボールが転がってきた。

「ん…？」

屈みこんでボールを拾うと、辺りを湿った風が吹き抜けた。霧が引いていく。

その向こうに、5歳くらいの小さな子どもが立っているのが見えた。子どもは漣の姿を見つけると、満面の笑顔を浮かべてこちらに駆け寄ってきた。

「ねえ、れいくん、一緒に遊ぼう！」

「…いいよ」

漣は拾ったボールを子どもにそつと投げた。

子どもは受け取り損ねて、転がったボールを追いかけて走り出す。見ると辺りには色とりどりのボールが転がっていた。赤やピンク、緑や白のそれらの中からまた青い色のものを抱えると

再び漣の元に駆け寄った。

「青いのが好きなのか？」

「うん」

子どもはボールにぎゅ、と頬をくつつけて言う。

「よくわかんない。けど、なんか好き」

「そっか」

漣がころころと転がしたボールを子どもが拾いに行く、そんな変則的なキャッチボールをして遊ぶ。

しばらくそんなことを続けていると、やがて拾ってきたボールを抱えた子どもが

漣の傍らで座りこんだ。

その大きな、何か金色に近い色に見える両目が眠たそうに伏せられている。

漣がその場にあぐらをかくと、その上に頭を凭せ掛け、やがてすやすやと寝息を立て始めた。

「…聖、」

また、辺りを霧が立ち込め始める。

——これは夢なんだと、漣はようやく気付いた。
傍らでは聖が眠っている。

そのさらさらした髪を撫でた。

…あの現実の方が夢なら良かったのに、と漣は思った。

もういつそのまま心地よい中で眠っていたい。

漣の体の周りをも真つ白に立ち込めた霧が、聖の姿を見えなくし、足に掛った重みがすう、と引いた。

「…おい、待てよ。聖、」

気が付けば、そこはいつもの自分のベッドの中だった。透かした窓から吹き込む風を感じる。起き上がる気にはなれず、もう少しそのまま寝ていよう。そう寝返りを打つと

漣の体にずん、と急にになにか重いものが乗った。ネコか何か、いやここにはそんなものは居なかったはずだ。

「うーん」

気のせいにしてはつきりとその重さを感じる。漣は嫌な予感がして布団の中に潜り込んだ。

考えたくないが、夏の風物詩なんかだったりしたらいやだ。夢の続きにしておもう。

漣は再びうとうとし始めた。

『…漣くん、もう朝だよ！早く起きてよ』

「…なに、なんだってんだよ聖、…俺は今自由の身なんだからもう少し寝かせてくれよ…」

漣は朝に弱く、バイトすら止めた今は午前中に起きればいい方だった。

聖はそんな漣を起こす際、呼びかけだけでは足りないことを知っている。その全体重を掛けて漣の布団に乗った。そうしてゆさゆさと体を揺らす。

『なおちゃんも早く起きなっていってるよ。起きないと僕、漣くん分のご飯食べちゃうからね!』

「お、おいちょっと待って、お前そんなに食べねーだろ…って、」

漣が目を開くと、体の重みが消えた。やはりそこには自分以外誰もいない。

時間は、もう9時を回っていた。ぼんやりする目元を擦る。見ると足元に青いビー玉が転がっていた。

ベッドから身を起こしそれを拾う。風がさあつと吹き込んでカーテンを揺らし、

太陽の光が室内に差し込んだ。

「——そう…なんだ。大変だったんだね」

奈緒は病院にやってきた桃に、事の顛末を話した。

彼女は長い髪を一つにまとめて高く結い上げ、落ち着いた配色の和服を身に着けていた。

年齢よりもどこか落ち着いた雰囲気がある。

「朝からニュースでやってたよ。…でもあれって、本当はただの事故じゃないんでしょう？」

「うん…でもまあ、色々知られたくないこともあるから…いいんだよ」

TVでは事故について関係者の会見なども報道されていたが、何故かその内容は建物の崩壊についてのみに追及されていた。

あの日、中で何が起きていたのかを知る者はもう奈緒たち以外にはいない。

「お姉さん、」

「うん？」

「…こーちゃんね、まだ見つからないんだよ」

「……」

奈緒は彼女になんと言えいいのかからなかった。それを察してか、桃がふつと微笑む。

「私のことなら心配しないで」

「…うん、お兄さん、きっと無事だって信じてるよ」

桃は急に真剣な表情を浮かべた。それはどこか、奈緒を突き放すような意味合いを持っていた。

「聖くんことは、私たちに任せてもらえるかな。…正直、お姉さんたちはもう、私と関わりにならない方がいいと思うの」

それは有無を言わさぬ言葉だった。

「それじゃあ、元気で」

「桃ちゃんも、…元気出してね」

「ありがとう」

別れ際、独り言を呟くように桃が言った。

「…私宛に、なんかヘンなのが送られてきたんだけど」

「え？」

聞き取れずにいた奈緒になんでもない、と言う。
ずっと、何か冷たいものを感じさせる笑みで、桃が笑った。

「お姉さん、私、やらなきゃいけないことが出来たんだ」

それから取り巻きの連中に紛れ、彼女はそのままどこかへと行ってしまった。

「やあ、久しぶり。元気そうよかった」

奈緒の家に水谷が再び訪れたのは、事故から数日が過ぎた頃だった。まだその額には、生々しい傷跡が残っている。奈緒は読んでいた新聞を折りたたんでテーブルに置いた。

「でも、おかしいよね。てっきりややこしいことになるのかと思ってたからさ」

「まあ情報操作がなされているというのは間違いない。あの、工藤とか呼ばれていた男は色々黒い部分に関わっていたからね。実をいうと隠さなくてはならないのはクローンに限ったことでもないんだ。」

事が明るみに出ないのはそうだった、まあ、大人の事情だ」

「…酷い話だ」

「それに近いうちにもう一件ぐらい、故意に別のスキャンダラスな事件も起きるだろうね。人々の興味関心は、常に新しいものへと向けられるものだ」

彼が言うように、製薬会社の旧施設ビル爆発事故のニュースは、次々と報道される新しいニュースに紛れ込んでいった。

クローンの子どものたちのことは知られることもないまま、研究は事実上廃止の形をとることになるのだろう。

水谷も、クレアも、もうそこには居ないのだから。

「まあこれで、不幸な子どもたちがこれ以上作られることはないよ」

奈緒はふう、とため息を吐いた。

「ところで、本当にいいのか？」

水谷は奈緒を見た。奈緒はふつと微笑んで頷く。

あの日、ベビーシッターの男と水谷が、命がけで助け出した子どもたち。

彼らの多くは、事実関係を伏せた上でどこか遠くの保護施設へと送られることになった。

その内の一人が今、水谷の傍らで眠っている。

奈緒がその子どもを自分の息子として引き取りたいと頼み込んだのだ。

「事情をよくわかっていて貴方に頼めるのは願ってもないことだ。しかし、この子は…。」

もしかしたら、さくら君たちのように成長することは出来ないかもしれない。…辛い思いをすることになるよ」

奈緒は子どもをそつと抱き上げた。すやすやと眠ったまま大人しく抱かれている。

「この子は僕が幸せにします」

「…ありがとう」

その様子を見ていたさくらがぼそ、と呟いた。

「…ねえちゃん、って、いうか…ほんとに男だったんだな。俺、結構シヨックだ」

奈緒は今、男物のシャツを着ている。化粧もしておらず短く切った髪に以前の面影は見当たらない。

「そりゃあ悪いことしたなあ…。今日からはこの子もいるんだし、いい加減夢を見るのはヤメなんだ。辛いけど、現実をみなきゃあなあ」

「髪、綺麗だったのに」

「あの時こげちゃったからさ。いい機会だしね」

さくらはうーん、と首を傾げて、何か不思議なものを見ているような目で、奈緒を見ている。まだ納得がいかないようだ。

「ところで雨宮君は、どうしてるんだ？」

ふつと表情を曇らせて、奈緒は漑の部屋のドアを見た。

「漑くんは、落ち込んだじゃってるよ。…僕なんかよりずっと辛い思いをしたんだね」

「そうか…ずっと自分の部屋に閉じこもっているのか」

「ううん、この時間ならまだ起きてこないから、いつもこんなだよ」

「ふむ」

水谷もそのドアを見つめた。

リビングに面した洋室の扉は重く、何かもう開くことがないようにさえ思えてくる。

「…今日ここに来たのにはもう一つ。急な話なんだが、私とさくら君はしばらく日本を離れることにしたんだ。かつての知り合いに声を掛けられていてね。さくら君も今回のことで非常にショックを受けている。ほとぼりを覚ます意味でもいい機会だと思ってるね」

「そうなんだ…海外って、どこになるの？」

「彼は今ロサンゼルスに住んでいるそうだ。最後に、雨宮君と少し話がしたかったが」

「そんな、漣くんだってお別れのあいさつしたいって！僕ちょっと起こして…」

その時、奈緒の言葉を遮るように部屋の扉がばん、と開いて中から漣が飛び出すような勢いで奈緒たちの前に現れた。

「漣くん！」

「ちょっと、待ってくれ！…俺、水谷さん」

漣は水谷の傍に駆け寄ると、彼に向かって土下座して頭を下げた。

「俺も…、アンタと一緒に連れて行ってくれ！」

「一体どうしたんだ」

漣は顔を上げた。

水谷をまっすぐに見据える目には、迷いのない意志が込められている。

「ずっと、話が聞こえてきてた。俺、ほんとはまだ寝てたいなんて甘ったれたこと思ってたけど、

…聖が、俺を起こしに来てくれたんだ。

俺、まだ会ったばかりで、アンタのことまだ何にもわかってねえ、けど。

初めてこんな自分を変えたいって思った。初めて、やりたいって、アンタと一緒にもっと広い世界が見たいって、思ったんだ。

…アンタの目的がなんなのか知らねえし、アメリカなんて右も左も

わかんねえし、そりゃ勿論迷惑だつてことわかってるけど！」

水谷は少し考え込むような仕草を試みせた。

さくらが驚いて丸くした目を、いつものように生意気な表情で伏せて漑を見る。

「俺はいいけどさ。おじさん、英語喋れんの？」

「…そりゃー、まあ、そんなはなんとかなんだよっ…多分」

そんな様子を見て、奈緒はくすつと笑った。

「奈緒さんー」

「いやあ、ごめんね。…ほら、僕ずっと漑くんが心配だったからさ、君のお父さんに連絡してたんだ。そしたらそう、グッドタイミング。今ウチに着いたって」

奈緒は携帯のメール画面を開いて見せた。

玄関の扉を開けると、そこには漑の父親が立っていた。

「親父…」

「漑…そうか、貴方が息子の恩人なんですね。もっと早くに挨拶に伺うべきでした。申し訳ない」

父は奈緒に頭を下げた。

「いえ、そんな。どうぞ上がってください」

「お邪魔します」

澪は父を正面に見据える。ぐ、と、言葉を詰まらせた。

「…少し、時間を作ってもらったんだ。まだ社内はごたごたしていてね」

「誠一、澪くんはなかなか実行力があるよ。そうは思わないかい？」

「だらけてばかりで何もしない息子だとおもっていたが、まさかこんなことをしでかすとはな。びっくりしたぞ」

「…すまねえ」

澪との距離を詰めると、父はいきなりその頬を殴りつけた。派手な音がして澪は後ろに倒れこむ。

「澪くん！」

頬を抑えて、澪は父を見上げた。彼が珍しく怒りの表情を浮かべている。

「私がどれだけお前を心配したことか。その怪我は一体どうしたんだ。」

人に迷惑を掛けるなど、そんな息子に育てたおぼえはない。

…反省して、心を入れ替えるまで、家には入れませんからな」

「……」

漣に背を向けて、父は水谷に頭を下げた。

「水谷、迷惑を掛けることになってしまっが…息子を頼む」

「わかったよ」

もう一度頭を下げ、奈緒に礼を言って、父は足早に帰って行った。

「いいお父さんだね、漣くん」

「親父のヤツ、無理しやがって…」

さくらが漣の傍らに立ち、ぎゅうと腕を掴んだ。

「おじさんは頼りねえからさ、俺がついてやるよ！」

「って俺のほうが年上だっつもの！大体おじさんってのは止めろ、俺はまだ二十歳にもなってねえよ！」

「ふむ。やはりさくら君は、君のことが大好きなんだな。…仕方ない。誠一の許しも得たことだし

若い男は何かと役にたつかもしれん。

いいだろう。君も一緒に連れて行くことにしよう」

「ありがとう！」

「ただしかし、日本に帰る予定は、今のところ立てていない。それでもいいんだね？」

漣は一瞬困惑の表情を浮かべ、奈緒をみた。奈緒も同じような顔をしていたが

につこりと微笑むと頷いた。漣を後押しするように。

「ああ、…わかった」

「ところで出発予定は今日なのだが大丈夫か？」

「なに！？」

「こういったことは早い方がいいだろう？片づけておきたい用事もあるから今日の夜の便で一度福岡に戻りたいんだ」

「早いにも程があるだろ！」

「慌ただしいねえ」

「…奈緒さん」

「ほら、僕も手伝ったげる。早く準備しな！」

奈緒は少し寂しそうな顔で笑いながら、漣の為に着替えや必要なものを見繕った。

さくらが乗り込む予定の便について問い合わせをしている。

「ダディ、空席があるって。漣ちゃんよかったね」

「漣兄ちゃんって…ま、まあいいけど」

漣はベッドサイドに置きっぱなしになっていた眼鏡に気が付いた。

少し迷ったが、ケースに仕舞い込むとカバンの奥に放り込んだ。

慌ただしく用意をし、漑は部屋の荷物をまとめると、見送りに出てきた奈緒と向き合った。

「今まで、ありがとう。俺の使ってた部屋、綺麗にしとく時間なくてゴメン」

「いいって。…寂しくなるなあ。ううん、これから僕も色々忙しいや。この子がいるんだもんね」

奈緒の腕の中で、子どもは眠っていた。その目が開き、子どもは奈緒を見上げると嬉しそうに笑い出した。

「僕きつと、漑くんのお父さんに負けなくらいいいお父さんになつてみせるからね。」

「これでお別れじゃないよね？いつか、また帰ってくるよね？」

「奈緒さん、」

「いつてらっしゃい、だからね。さよならは言わないよ」

「…落ち着いたら、連絡するよ。本当にありがとう」

「男が泣かないの！」

奈緒は自分も泣きそうになりながら笑っていた。そうして漑の肩を

激励の意味を込めて叩いた。

漣は涙を拭うこともせずに精いっぱい笑顔浮かべ、言葉にするために腹の底から大声を張り上げた。

「今まで、お世話になりました！」

水谷の待つ車に乗り込んで、漣は窓を開けて奈緒に手を振った。遠ざかる車が見えなくなるまで、奈緒はずっと見送っていた。

子どもがああ、とぐずり始める。

「よしよし。お腹がすいたのかな？…君の名前、いいの付けたげるからね」

水谷の運転する車は空港へと向かっている。相変わらず無駄に振動する、素晴らしい乗り心地の悪さである。

漣は助手席の窓を開けた。生ぬるい風が吹き込んでくる。

「なんかさあ、俺やつと夢から覚めたんかなあ…。今そんな気分なんだ。朝起きて、気分スッキリみたいだな。まあ我ながらよく寝たもんだよな」

「夢はいいものだよ。そうは思わないかい？今我々の周りにあるものの全てが誰かの夢の形なんだ。このボロボロの車もね」

「…アンタって、意外とロマンチストなんだな」

「まあ、夢をみるというよりは、夢を持つと言った方が前向きではある」

「そっちの夢ならいいんだけどな」

漣は法定速度で流れていく町の景色を眺めていた。

——とてつもないスピードで、人生が変わることがあるものだ。

それは高速で駆け抜ける車に乗ったかのように爽快でもあった。

ただし、先行きのわからない不安も同じスピードでついて回るのが。

漣は今くらいの速度がちょうどいいと感じていた。あまり飛ばすとこの車はそれこそ空中分解しかねないし、まず間違いなく酷い車酔いになるだろう。

「まあ、私のかつて持っていた夢は、持つべきものではなかったのかもしれない。…さて。

新しい人生の始まりだ。今度は何を始めようかと、今私は胸が高鳴っている。君にも聞こえないかね？」

「…ああ、そうだ。アンタみたいな変人は、俺がついててなきやダメだ。何しかすかわっかんねえからな！」

「それは頼もしい」

本人は至って大真面目な水谷とのやり取りに、漑は堪らなくなって吹き出した。

何がおかしいのかと水谷が訝しんでいる。笑われるのは心外のようだ。

「そういえばさ…漑兄ちゃん、眼鏡してないよ？」

ふつと気付いたさくらが漑をまじまじと見つめながら言った。

「ああ、それは…もういいんだ」

「ヘンなの」

漑は窓の外の空を眺める。

綺麗だ、と言われた自らの瞳と同じ色をしたどこまでも青い空だ。太陽の光が眩しくて、漑は瞼を擦った。

特に思い出すことはないけれど、それはそれでいい夢を見ていたような気がする。

夢の終わりに（後書き）

この話を読んで下さった皆さんに感謝します、本当にありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4869s/>

僕らは長い長い夢をみていた

2011年11月13日22時19分発行